

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Design and Construction Technique of Korean Chests, Boxes and Shelves in the National Museum of Ethnology

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 車, 政弘<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00004404">https://doi.org/10.15021/00004404</a>                 |

## 国立民族学博物館所蔵の韓国の収納家具

—その技術とデザイン—

車 政 弘\*

The Design and Construction Technique of Korean Chests, Boxes  
and Shelves in the National Museum of Ethnology

Masahiro KURUMA

This paper describes the construction techniques and design of 30 pieces of Korean furniture (chests, boxes and shelves) in the collection of the National Museum of Ethnology. It deals with 1) form and proportion, 2) structure and jointing, 3) kinds of wood used, 4) finishing and 5) decorative patterns.

1) Most of the furniture shows integral number proportion. Many chests are given variety of form via top boards and legs. The rice chest (*twiju*) is a particular case where top boards have the well-known “golden section” proportion.

2) Opening and closing the furniture is effected by either pulling down the upper part of the front panel or by hanging it up or by pulling the front of the top boards or by removing a detachable door.

Boards in large chests are jointed by a “dovetail joint” strengthening by bamboo or iron nails, or by a L-shaped metal fitting. The *kokashibame* technique is used for jointing parts of frames and boards. Rice chests exhibit particular jointing in the frame, *i.e.*, a kind of *igetakumitsugi*.

3) Pine and paulownia are the favorite materials used to make Korean furniture. Besides, such ring-porous woods as zelkova, elm and chestnut, and diffuse-porous ones like maple and persimmon (or ebony) are used. But, a few kinds of ring- or diffuse-porous wood used are not yet identified.

4) Perilla, tung and walnut oil as well as japan are used as finishing material. The surface of paulownia parts is finished by burning and brushing.

\* 九州産業大学, 国立民族学博物館共同研究員

5) Most pieces of Korean furniture are abundantly decorated with motifs based on natural phenomena or from the animal or plant world. The motifs express the wishes for longlife and happiness.

|              |           |
|--------------|-----------|
| I. はじめに      | III. 考 察  |
| II. 個別資料     | 1. 形態について |
| 1. パンダジ      | 2. 構造について |
| 2. 銭箱        | 3. 使用樹種   |
| 3. 大庁, 饌房用家具 | 4. 塗装・仕上げ |
| 4. 舎廊房用家具    | 5. 装飾文様   |
| 5. 内房用家具     | IV. まとめ   |
| 6. 菓だんす      |           |

## I. は じ め に

韓国の家具木工品の大半は、李氏朝鮮時代（1392～1897）にその様式を整えたものであり、儒教が生活の規範として確固たる時代に展開されたものである。この李朝の家具木工品の美については、柳宗悦をはじめとする民芸運動に携わった人々によって力説され、わが国における韓国の造形の特質は印象としてかなり明確になっているように思える。

しかしながら、家具にしる、比較的小さな木工品にしる、その印象については知り得るものの、形態や構造の詳細、技術的な特質や使用樹種について、また、人々の生活の中でどのように位置づけられ、そして使われてきたのか、個々の家具を通じて詳しく述べられたことはなかった。

もちろん、美は、それらをこえて、きわめて直観的なものではあろう。しかし、少なくとも、生活用具である以上、それを支える技術や、造形の特質について注意深く見ることは、不可欠な条件のように思える。

国立民族学博物館（以下民博と略す）に収蔵、展示されている韓国関係の標本資料は現在1,482点である。このうち主として家屋内で使用される木製品は129点<sup>1)</sup>で一応のまとまりを持ったものである。

1) 楽器やきね、臼、砵などは除外し、また、部分的に木製のものもあり得ることで、そうしたものは数に入れてはいない。

木製家具、木工品は、その用途を大別するとおおむね、料理や洗濯に使われる木工品と、膳や文机などの家具および、それに付随する木工品、そして、大型の収納家具や箱類、棚類、さらに祭祀用の家具となるだろう。

この報告では、このうち収納家具30点について、その形態、構造、使用樹種ならびに仕上げ法、装飾文様を中心にみてみたい。

収納家具は、生活財が豊かになり、それを保管整理するために成りたつものであり、あるいは階層社会の確立ないしは個の意識の確立と共に豊富化するものである。

従って、収納家具の機能は、それを使う人々の生活全般、生活意識をよく理解しない限り、はっきりしたことはいえない。収納家具の機能や住空間のなかでの位置づけなど、使われ方についての問題は後日明らかにしなければならないだろう。

ここでは、30例の収納家具の形態の特徴や、各接合部がどのような技法であるのか、また使われている木材はどのような樹種であるのか、仕上げにどのような技法が用いられているのか、装飾金具、連結、緊結金具にはどんな種類のものがあるのかなどを中心に記述し、それぞれについて考察する。

家具に関する記述ではどうしても接合法について木工用語を多く用いることになる。これについては成田寿一郎、鳥海義之助、中村達太郎の用例を参照し<sup>2)</sup>、初出の個所に脚注で説明を加えた。本文中では木工用語の個所は「 」を付した。

韓国語の発音表記については、McCune-Reischauer 式とした。

## Ⅱ. 個別資料

### 1. パンダジ

パンダジ(반닫이・半開, 半櫃)は、前面の上半分だけを開閉する櫃で、各地方により特色のある形態、装飾金具を有するものである。その一般的特色を略記すると次のとおりである。

(1) 平壤パンダジは大きく、前面に大きい装飾金具が多くつけられている。その装飾金具は直線的である。

(2) 開城パンダジは平壤パンダジにくらべ小振りで、装飾金具も簡素なものである。手前に開く板(문판・門板)の木口、木端が天板と側板(옆널・横板)で被われ、門板が閉じた状態では、その木口、木端が見えなくなる方法は、他の例にない特徴であ

2) [成田 1977; 鳥海 1980; 中村 1913] を参照。

る。

(3) 京畿パンダジは装飾金具が小振りで、直線的、清潔な印象を与える。ソウルを中心とする地方で作られたものである。

(4) 慶尚道パンダジは、最も小振りなものに属する。木理文がはっきりと出ているのが特色である。

(5) 全州パンダジは燕尾蝶番をつけ、内部の上部に3つの引出しがつけられている。

(6) 済州パンダジは、済州道の気候が、比較的温暖湿潤であるところから、重要書類や記録を湿気から守るために使われた [WICKMAN 1980: 72]。

パンダジの中で全北、胡南地方の形はやや薄い感を与えるが、北の平安道産はやや厚くて重い感を与える [裴 1983: 47]。

形態のサイズやプロポーションと装飾金具によって、生産地や使用地の特定ができることは、日本におけるたんすの場合と同様である。

Wickman はパンダジに blanket chest という語をあてているが、これは、その本文中でも、寝具入れではないという記述があり、このパンダジの上に積み重ねることはあっても、パンダジの中に入れるものではない。なぜ blanket chest と名称を与えたかは、中国における同型の家具の使用法を類推したものと考えられる<sup>3)</sup>。

むしろ、衣類や身のまわりの品、書類、文房具を入れるために使われた可能性の方が高いと考えられる。

これらを念頭に置いて以下の標本をみてみよう。

#### 例1 [標本番号] H0080914 タンス [使用地] 大韓民国 (付図1)

全体の印象で特に挙げられるものは、不老草文<sup>4)</sup>の前金具と、つやのある塗り、そして、内部に設けられた小引出しと棚であろう。これらから、全州パンダジに近いものだとすることができる。

幅 100.5 cm, 奥行き 50.4 cm, 高さ 70.4 cm で使用樹種はマツで、透き漆(顔料の入らない透明のうるし)が塗られている。天板は厚さ 2.6 cm で、底板は 2.7 cm 前後、側板は 2.4 cm, 背板は 1.5 cm である。それぞれ、できるだけ広い板を使おうとする意図があり、天板、側板、<sup>てんいた</sup>背板、<sup>がわいた</sup>背板、<sup>せいた</sup>底板はそれぞれ「2枚はぎ合せ<sup>5)</sup>」であり

3) 北京郊外の農村では同じようなかたちのもので、幅 120 cm×高さ 120 cm ぐらいのものが寝具入れとして現在も使われている。

4) 不老草文は、中国、日本では靈芝、ないしは芝と呼ぶ。靈芝はサルノコシカケ科のきのこで、これを食べれば万病に効くとされ古来さまざまな装飾に用いられている。

5) はぎ合せは「矧ぎ合せ」と木工用語で表記し、同じ厚さの板をはぎ合わせる方法は「平矧ぎ接ぎ」と一般的に呼ばれ、17種の方法がある【鳥海 1980: 52】。ここでは、同じ厚さの板を連続

「3枚はぎ合せ」はない。背板には約 55 cm 幅の板が使われている。

前面は、側板と固定される下半分の板、前板(앞널)と、前板に蝶番で連結し開閉できる上半分の門板でなりたち、それぞれ1枚の板である。

前板と側板は「てんびんざし<sup>6)</sup>」に近い組手で、側板、背板の「あり組みつき<sup>7)</sup>」となり、これに天板、底板をかぶせる形となっている。天板、底板を側板、背板、前板に接合する方法は竹、または鉄くぎを打ちつけることによってなされ、これに、L字形のかすがいの機能を持つ帯金具(감잡이)で固定補強している。

ぶあつい板で構成された箱形の下には角材2本の台に相当する材が取り付けられている。

鉄の錠前の座金(앞바탕)は大きな不老草文であり、3枚の蝶番の門板側には八卦の「離」にあたる透刻文があり、前板には吉祥文の卍字文が打ち抜かれ、全体の形状は不老草文の変形とも宝相華文の一部をとったとも見える形が伸びている。門板について2個のこうもり文の座金付半月形取手の両わきには菊花文を中心に持つ水仙花文(봉수선화)<sup>8)</sup>が配され、また前板にもこうもり文の座金付半月形取手が2個取り付けられ、両側面には、移動、運搬のための大きな取手がつけられている。このパンダジには部品としての金具が47個ついており、その構造の豪快さとともに装飾金具のこの家具全体に対するウェイトは大きいと言わねばならない。

門板を開けると、内部の上端部分は棚と3つの引出しからなっている。引出しの両側の棧は角が削られ半丸の面となったマツ材で、付図1に見るように、かつての縦の棧があったと考えられる補修のあとがある。このような状態から考えても、上半部には、それぞれ小さなものが、しっかり区分され収納されていたことがうかがえる。引

---

くさせて1枚の板とすることを、はぎ合せと一般的にいう。後述に「あいじゃくり平はぎ」がでてくるが、これは「相決り平矧ぎ」で、板材の相互の木端をL字形に削り取ることで、「相欠ぎつき」とも「さくり」ともいう[成田 1977: 1]。

6) 「てんびんざし」は「天秤差し」と表記し「天秤組接ぎ」ともいう。板の組手接ぎの「蟻組接ぎ」の1種で、台形に見える木口の上辺が狭く、ちょうど、はかりのバランスをとる支点と同じ形に見えることからこの名称がある[中村 1913: 240; 成田 1977: 136]。

7) 「あり」とは「蟻」で英語ではその組手のかたちが鳩の尾のように広がっているため、dovetail joint と言う。組みあわされた板材の組手の木口が、片面では、この鳩の尾のように台形になり、もう一方の面では矩形となって並ぶかたちの接合法を言う。また、狐の尾の形をしているとも見たて fox tail ともいう[中村 1913: 242; 成田 1977: 8]。

8) 봉수선화는、正確なところどう翻訳するのか筆者にはわからないが、수선화는明らかに水仙花であり、形状から鳳仙花文(봉선화)とも考えられず、一応水仙花文と記すことにした。また同形の文様を梨花(이화)文と表現する場合もあり、宝相華文を봉수선화文と表記している場合もあり判然としない[裊 1983: 127-133; 鄭 1974b: 984]。봉は鳳の意であり、鳳水仙花かも知れない。

「水仙は、新春の瑞兆花とされ、冬の表象とされている。また水仙の仙は天仙の仙であるため吉祥の花とされている」[岡登 1968: 165]。ただ文様の花卉が5枚であるので、他の花がモチーフかも知れない。

出しもそれぞれ幅 25.8 cm, 奥行き 22.5 cm, 高さ 6.5 cm, 幅 16.4 cm, 奥行き 22.5 cm, 高さ 6.5 cm と浅く、小さく、文房具や小さな品物、書類などが収納されるようになっている。

両わきの棚は、前板から背板へ渡すかたちになっており、内部の様子から見て、「済州パンダジは、その気候の理由で、重要な書類や記録を湿気から守るために使われた」[WICKMAN 1980: 72] といわれるが、このパンダジもまた、そうした使われ方をしたと見るのが妥当であろう。

再び表面にもどり、門板と側板との関係について注意しておきたい。門板は、側板に対し、かぶせ蓋のような関係である。

## 例2 [標本番号] H0067446 貴重品入れ [使用地] 京畿道

この資料の情報カードには「金品や書類などの貴重品を入れておくもの」と書かれている。

幅 96 cm, 奥行き 45 cm, 高さ 78.6 cm で、前述のパンダジよりやや小振りで、天板、底板の厚さは 2.4 cm, 側板、門板、背板の厚さは 2.1 cm-2.2 cm で、底部には2本の角材が台として、それぞれ、3本の鉄くぎで打ちつけられている。

背板は「あいじゃくり平はぎ」の2枚はぎ合せで、底板も木口面から見ると同じような接合になっている。しかも木材が収縮して、離れてしまった接合面を見ると、2本の「木口取り雇いぎね」が見え、これによって接合を強化安定させていることがわかる。このことから、背板のはぎ合せも同様の手法がとられているとも考えられる。

天板と側板は、「23枚あり組みつぎ」で、補助的に数箇所鉄くぎを打ち付けたところが見られる<sup>9)</sup>。後に補修されたものかと思われる。

側板と底板は「11枚あり組みつぎ」となっているが、同じ「あり組みつぎ」でも、上部と下部とで精粗がある。

側板と背板は「鉄くぎ打付けつぎ」に見える。

前板と側板のつぎでは、側板面に前板の厚みの半分ほどの「ほぞ<sup>10)</sup>」が一定間隔に3本見られる。この接合は、「通し小根小ほぞ組みつぎ」の場合と「散らし小ほぞ組みつぎ」の場合とが考えられるが、前板の板幅が 37.6 cm もあり、前者とも考えられるが、側板の前板との接合面がやや欠きこまれていることを考慮に入れば、後者

9) 鉄くぎには、ハンドメイドの鍛造の鉄くぎもあれば、いわゆる洋くぎという工業生産されたものもある。補修用には、くぎの頭に格子が入った新しいくぎが使用されている。

10) 主として角材どうしを直角方向に接合するため、接合する一方の部材の木口部分につくる4角の突起 [成田 1977: 189] で、ここでは板材接合に「枘」が使われている。英語では tenon。「ほぞ組みつぎ」も多様な方法がある。

でも十分な接合になり得る。

門板も前板も、側板を欠きこんで、そこにはめこまれたような仕上げになっている。前述の門板と側板の例とは異なる方法である。

板の一部が欠損したり、組み立ての過程で欠損した部分があると、のちに別の木材を埋めこむようにすることは他の例でもしばしば見受けられることである。この場合、天板左前部と底板、側板の接合部にそれぞれ1カ所見受けられる。

金具は比較的少なく、次のとおりである。門板と前板を連結する4つの蝶番は、全体の長さ23 cm、幅9 cmの燕尾形蝶番で、卍字文の透刻がある。

門板の左右には菊花文の座金をもつ半月形取手<sup>11)</sup>がある。取手が板に当る位置には座金をつけて、板に取手が直接接触して傷がつかないようにすることは一般的に行われることだが、この場合、取手と取手受け金具の関係というには不十分な位置に花形座金が打ちつけられている。

施錠する部分の座金、前金具は高さ16.5 cmで幅19 cmと大きく、燕尾形金具に卍字文の透刻が入っている。これは、天板の雲形文様金具に形態としてひと続きになっている。

錠をかける天板からL字に下がる金具(뽕침대)の厚さは6 mmである。

前板中央部にはこうもり文の装飾金具が取り付けられている。これは、門板が開いた時、錠前を通す錠<sup>かん</sup>が前板に直接あたらないような位置にある。

また、左右の側板には移動、運搬用の取手金具が取り付けられている。この取手の2つの回転軸は水平になっていず、また左右の取手の位置は側板の中央部から少しずれ、高さも左右で異なる。

取手や施錠用金具は、錠状の金具で固定され、この錠状金具は、木部に穴を開けて、たたきこみ、裏側で、その先端を割りピンのように曲げる方法であり、この固定法は他の例においても同様である。

蝶番は、後に取りつけられたものである。門板と前板双方の木端面に平蝶番を取りつけていたと見られる欠きこみが認められる。

底板、背板ともに「鉄くぎ打付けつき」の個所が多く近年補修をしたものだとすることがうかがえる。

### 例3 [標本番号] H0084768 パンダジ [使用地] 済州島(写真1)

仕上げは透明の塗りで、その装飾金具から見て典型的な済州パンダジである。幅

11) 半月形取手(반달달쇠)は、わが国では、これと同様の形状のものを蕨手(わらびて)形の取手というが、わらび手様の取手は確かに半月形取手よりまきこんだ形のようなものである。

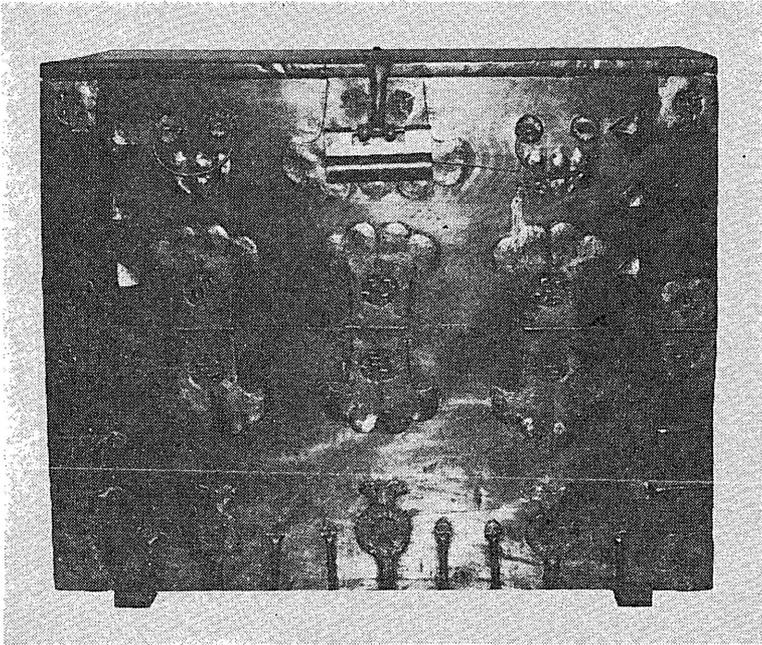


写真1 例3 タンス 現地名 반닫이 (pandati), 使用地 濟州島

86.7 cm, 奥行き 44.5 cm, 高さ 73.5 cm で、天板の木目方向にはほぼ直角に、鈍様の刃物で削ったような凹凸があり、ニレの木理とあいまってうねりのように見え、その荒々しさが印象的である。

厚さ 1.8 cm ほどの天板と厚さ 1.5 cm の側板は「9枚あり組みつき」で、側板と天板双方から竹くぎを打ち付けて強化している。左右の側板は木目方向の違うはぎ合せ、つまり木端面と木口面をはぎ合せた状態である。このようなはぎ合せは、あまり例を見ない。一般的に板の木端間の収縮率が大きく、板の長手方向、つまり木口間の収縮率は小さい。材の乾燥が不十分の場合、または湿度の変化によって、この差が大きくなるので通常こうしたはぎ合せは避けるものである。しかしこの場合、さして材が動いたようには見えない。はぎ合せの方法としては「本ざね平はぎ」「雇いざねはぎ」「やはずはぎ」「合いくぎつけつき」などの方法が考えられるが、表面からは判別できない。

背板は幅 44.5 cm の大きな板と、3枚の幅の狭い、しかも長方形ではない板がはぎ合されている。背板は、側板、天板に数カ所鉄くぎでとめられているように見える。

底板は、背板、側板に対して欠きこみの底となり、前面には底板の木端面は出ないかたちで処理されている。

前板は厚さ 1.4 cm、幅 30 cm と 7 cm の 2 枚はぎ合せて、L 字形帯金具で接合強化されている。

前板と側板、底板の接合は接着剤と竹くぎで接合した上で、L 字型帯金具で接合強化したのか、その他の方法がとられているのか詳細はわからない。

厚さ 1.4 cm の門板は、側板に対してかぶせるかたちとなり、前面から側板は見えない。

3 個の蝶番は卍字形透刻文を持つ不老草文様の金具で、錠前座金も、幅 24 cm の大きな不老草文様に、蝶番と同様、卍字形透刻文がある。

取手は菊花文様の座金に半月形取手が左右に配されており、この左右の取手位置は高さが 1.5 cm ほど違っている。また、取手が板にあたる位置にはこうもり文の座金がつけられている。

門板の両脇の正四角錐の金具は広頭くぎ(광두정)と呼ばれ、ふつうはくぎの頭を隠すために使われるのだが、ここでは装飾性を高める目的のみで使われている。

前板、門板の四隅の隅金具は、門板の場合は前面のみで、側面への折れ曲りはなく、前板のそれは側面へ曲りこむ金具となっている。

前板と側板、底板を接合する金具は、かんざし文留め金具(비녀잠아이)と蓮峯形<sup>れんぼう</sup>の L 字留め金具の 2 種である。天板と側板、側板と底板には留め金具は用いられていない。

左右の側板には移動運搬用の半月形取手金具があり、金具はいずれも鉄製で、ふくらみが大きく、重量感がある。そして、金具が装飾金具だけではなく、接合部の接合強化をする金具も前面にだけ施されており、正面から見える部分だけに意を注いだようにみとれる。

#### 例 4 [標本番号] H0067444 タンス [使用地] 大韓民国 (付図 2)

情報カードには「全州地方で使われたもので、男の間、舎廊(사랑)に置き、身のまわりの品を入れるタンス。通称マリチャン(마리잔)」と記されているが、마리잔ではなく머리장(mörijang)だと考えられる。所謂全州織<sup>ジョアン</sup>(전주장・chönjujang)と呼ばれるものである。見たところ 2 層に積み重ねた二層織のように見えるが、これは一体のものであり、しかも、下部には門板があり、パンダジ同様の使い方が考えられる。

全州パンダジは内部に引出しを持っている。しかし、この全州織では、引出しは内部にあるのではなく、表面にあらわれ、両開き扉のついた別の収納部分がつけ加えられ、全体の寸法が、幅 90 cm、奥行き 38.8 cm、高さ 95 cm であり、これからもわかるように、収納容積は拡大されている。

パンダジの機能が拡充されたものがこの全州織だとも考えられるし、同じような発想から、小型のもの大型のものと2つに区分され全州パンダジと全州織の形を生んだのだとも考えられそうである。

天板と側板、側板と底板はそれぞれマツ材の「8枚あり組みつき」で、板厚はいずれも2cm。背板厚さ2.3cmで、幅34cm, 24cm, 32cmのマツ材が横に平はぎ合せとなり、鉄くぎで側板、天板、底板に打ちつけられている。

前面はクリ材からなっており、前面上半部は2cm×2.3cmの円弧の断面形状の面縁で構成され、その4隅は「留めつき<sup>12)</sup>」になっている。これが単なる留めのつけ面か、「留め形かくしほぞつき」かは不明である。横棧(쇠)や小束(童子木=가루동자や기둥)は合せ面のみで接合で、金具で押えこむかたちである。

3個の引出し(幅26cm, 奥行き33cm, 高さ7.2cm)は材質と仕上げから見て、新たに作られたものである。

両開き扉は板厚1cmで上下に板のそりを防止するための「留め形端ばめ<sup>13)</sup>」があり、通常留め形はしばめは、①留め打付け端ばめ、②通しほぞ本ざね留め端ばめ、③本ざね留め端ばめなどがあるが、この場合は①である。

下半部はパンダジと同じように門板があり、この裏面の両脇に縦に棧木が打ちつけられている。この棧木があれば、実質的には蝶番は不要となるはずである。

両開き扉には、長寿の象徴である「波上の亀」が彫刻されている。よく見るとこの亀には耳があり、玄武の古型における亀<sup>14)</sup>と同様の多分に想像的形象となっている。

金具は総て鉄製で、引出しにはこうもり文の取手がつけられ、両開き扉の蝶番は少し扉に対して大きすぎる蝶文様である。蝶文様は舎廊房(사랑방)や舎廊棟(사랑채)の家具にではなく、女の部屋、内房(안방)の家具に多く見られるものである。

扉の錠前座金は宝相華文であり、上半部の横棧(쇠), 柱(기둥), 小束はそれぞれT字形、L字形留め金具や、I字型平金具で接合強化されている。また天板、側板、背板、底板はそれぞれ隅金具とL字形带状金具で接合強化されている。

下半部は、門板、前板に蝶番4個がつけられ、錠前座金、9個の隅金具、前板と底板を接合する12個の金具があり、全体的に双喜文様の透刻がなされている。門板と前

12) 「留めつき」は miter joint。2つの部材を直角に接合するとき、両部材の角を半分ずつ削り、とって接合、接着する方法で、ふつう45°ずつに削る [成田 1977: 143]。後述の「留め形通し平ほぞつき」もこの一種である。

13) 「留め形端ばめ」で、「端嵌め」または「端食み」の一種。広幅厚板の木口の割れや反張(そり)を防ぐために用いられる方法 [成田 1977: 162] で、正倉院の「赤漆文樺木厨子」などにもこの技法が使われている。

14) たとえば唐時代の玄武、石室彫飾文 [渡辺 1971: 250]。

板には菊花文座金を持つ半月形取手が配され、また花形の装飾金具がつけられている。左右の側板には門板、前板のと同じ半月形取手がある。

## 2. 銭 箱

民博には3点の銭箱が収蔵されているが、そのいずれも、大振りであり、貨幣投入口のあるタイプではないから、日本の江戸～明治の頃、商家の店先で使われたような銭箱と同じ性格のものとは考えられない。貨幣のストックに使用されたものであろう。それにしても、なぜこのように大振りの銭箱が必要だったのだろうか。このことについて、米国の宣教師であり、医者であり、全州で過ごした Mattie Ingold の1898年のノートには次のように記されている。「もし朝鮮の貨幣が、その重さと不恰好さに比例して価値も大きいものであれば、朝鮮の民は豊かな国民になったであろう。彼らは流通媒体として1つの貨幣しか持たない。それは、見たところ黄銅で、われわれの25セント硬貨と同じぐらいだが、それは、大きかったり小さかったりのイレギュラー・サイズなのである。この貨幣を外国人は“キャッシュ”と言い、当地の言葉では1つの硬貨は“プーン”であり、10プーンは1トン、10トンは1ニャンであり、100プーンが1ニャンである。100個以上ともなればひもで結ばれる。1プーンは $\frac{1}{10}$ セントで、100プーンは10セントとなる。5ドルの買い物をしようと思えば、5000個の“キャッシュ”が必要であり、貨幣を入れるためのほど良いサイズの強い箱が必要である [WICKMAN 1980: 76]。

このコインは、17世紀より鑄造された常平通宝であり、李朝末期には、こうした銭箱が相当数作られ、使われていたと考えられる<sup>15)</sup>。もっとも、穀類や布帛などの物々交換も盛んに行われていた。

銭箱はトン (ton'gwe) であり、李朝の貨幣の単位は分 (분), 銭 (돈), 両 (냥) であった。この銭が貨幣を代表するいい方になっているのはわが国と同様である。

### 例5 [標本番号] H0084769 銭箱 [使用地] 慶尚道 (付図3)

これは、3点の銭箱のうちで最も軽い。それは、使用樹種がキリであること、そして、その板厚が1.2 cm と比較的薄いことによる。

サイズは幅 63.2 cm, 奥行き 31.7 cm, 高さ 35.2 cm で3点の銭箱の中で最も小さ

15) 1678年以降官鑄の小額貨幣である「常平通宝(4角の穴が開いた銅貨で葉銭(ヨグジョン)と通称された)」が常時鑄造され、広汎に流通するようになった。これは商品貨幣経済の全般的展開の反映で、限られた流通範囲しか持たない大型貴金属貨幣とは意味が違う [梶村 1977: 80]。

い。

上面のうち開閉する蓋板は 20.4 cm の奥行きである。

前板、背板、底板は、すべて2枚はぎ合せで、前板は1枚の板を2枚に切り開いたかたちで使われており、上下の板の木理は対称になっている。前板と側板、背板と側板の接合は、やや不ぞろいな「13枚あり組みつぎ」で、数カ所、断面 4 mm 角の竹くぎが補強に使用され、天板と側板、背板との接合は「竹くぎ打付けつぎ」で、底板は前、側、背各板に20本の竹くぎが打ちつけられている。

底板の下には 3.1 cm×1.8 cm の断面の角材の台部がある。

鉄金具は多くなく簡素である。2つの蝶番は燕尾文というには曲線が少ないものであり、錠前座金も直線的で、円の透刻が並ぶだけのものである。蓋板の棧木の取り付け用の竹くぎの頭を隠す鋸も直径 1.8 cm くらいの花弁文で4つあるだけである。前板と背板に花卉文座金付きの半月形移動用取手金具がついている。

この銭箱には、蝶番と共に、同じ機能を持つ棧木が、蓋板の裏面に2本打ちつけられている。

#### 例6 [標本番号] H0084770 銭箱 [使用地] 京畿道

幅 87 cm、奥行き 41.8 cm、高さ 37.8 cm で3つの銭箱の中でいちばん大きく、カエデ材のようである。全体の板厚は2cmでふあつく、底板の下には 3.6 cm×4 cm の断面の角材が箱を支えている。蓋板は、正確な長方形ではなく、手前両側から中央部の金具の位置まで、奥行き寸法が漸増し、中央の金具の位置が、箱の身（前板）より前に突き出たようになっている。

木材はフシが多く、各面にヒビ割れがある。

前板と側板、側板と背板は「15枚あり組みつぎ」で、蓋板、天板、底板はちょうどロの字形になるように側板、前板、背板にそれぞれかぶせるような取り付け方となっており、底板は、「鉄くぎ打付けつぎ」で、側板、前板、背板に接合されている。

底板のみ2枚はぎで、「相じゃくり平はぎ」となっている。

鉄の蝶番は 14.2 cm×3.3 cm の簡単なものが2枚で、錠前座金は、蓋板の方が幅 15.6 cm、奥行き 17.8 cm の雲文の雲囲気もあるが、矩形の印象が強いものである。前板側の錠前座金も幅 15.6 cm、高さ 18.3 cm の矩形であり、円形の透刻がある。

側板、前板、天板、底板はそれぞれ、34個の蓮峯形L字形金具でしっかり補強固定されている。このうち底部のL字形金具は片方がかすがい状になった金具である。

前記標本とは異なり、移動用取手金具は両側板に取り付けられている。

例7 [標本番号] H0067443 銭箱 [使用地] 大韓民国

情報カードには「李朝時代に使われたもので、俗称棄銭と呼ぶ。ナワで通したものをに入れてたくわえる」とある。

幅 63.5 cm, 奥行 40 cm, 高さ 40 cm でニレが使われているこの銭箱は小振りだが、ガッチリした印象を与える銭箱で、天板、蓋板は厚さ 2.4 cm で、側板、底板、背板共に厚さ 2 cm。底板は板幅 30 cm と 10 cm の2枚の板がはぎ合されている。

前板、側板、背板は「17枚あり組みつき」で接合され、竹くぎの使用はない。天、底板は「鉄くぎ打付けつき」で、蓋板と天板は、前述2点と異なり蝶番はなく、蓋板裏側にくぎで打ち付けられた2本の椶木があり、施錠した時、蓋板がはずれないようになっている。

金具は、錠前部分のみで前板上部に幅 16 cm, 高さ 13 cm の卍字透刻文のある不老草文座金をもつ錠前さし金具があるのみの簡素なものである。

内部には、その各隅部分に、手すきの紙が目張りされ、底板の部分は全体に紙が張られている。また、底板のはぎ合せ部分が、板の収縮によってすきまができ、そのすきまを埋めるために使われている紙は第2次大戦後の新聞紙である。

この紙張りの様子から考えると、銭箱としての機能を終えた後も、何らかの別の用途、例えば、穀物櫃のような用途に供されてきたものと見ることができよう。

### 3. 大庁、饌房用家具

米櫃(斗子)は、他の家具とくらべ、きわめて特徴的な形態であり、そのディテールも、注目すべきものを持っている。

米櫃について、野村孝文は「慶南山清郡の一農家の主屋棟大庁の後壁の板壁に4分の1間の深さの日用の穀物収蔵庫がある。これもティジュと言っているが、これは桐華寺や双溪寺などにも、もっと規模の大きいものがある。これを主屋棟外に独立させて造ったものが咸陽郡や順興地方の京である。これは四起(四柱脚)の小倉であり、累木式ではないが、桴京に関連があるのではないか」[野村 1981: 154]として、「独立した米倉が建物に近く設けられ、ついで建物内で間(カン)となり、さらに造りつけの収納施設となり、遂に一つの家具になったという経路が考えられそうである<sup>16)</sup>」[野村 1981: 154]と述べている。

16) 元、王楙の「農書」の倉庫の項によると高床方形の木造の倉庫である京(椋)は湿気が多い南方起源で、地面に直接建てられる円形倉庫の困(きん)は北方系統のものとされている。

三国時代の高句麗人の庶民住宅では『新唐書』『高麗伝』に「積木為楼」と言い、『魏志卷三〇』には「無大倉庫家每有小倉云之桴京」の句があり、累木式(校倉造りに似た井韓式・クイトルチプ)の建物と高床式の建物があったことが知られる【野村 1981: 132-134】。

米櫃が据えられる大庁(대청)自体、米の収蔵空間の性格を持つものと指摘されていることや、この米櫃の上には、帝釈壺(제석호)または祖先壺(조선호)が置かれることから見ても<sup>17)</sup>、あるいは「例えば、中部朝鮮民家の板の間、即ち大庁(마루)があって、そこに成造(성조, 성주)という家宅をまつている」[秋葉 1954: 33] ことなどを考え合せると、きわめて興味深い家具だということができる。

しかし、単に穀物収蔵という点から言えばこの米櫃だけが使用された訳ではなく、釜屋(부엌)の一部に穀物壺を置いて収蔵する場合 [野村 1981: 158] もあれば、稲ワラで作ったマンテギと呼ばれる穀物籠もあるという。

**例 8** [標本番号] **H0095326** 米櫃 [使用地] 大韓民国 (付図 4)

大きさは幅 108.9 cm, 奥行き 66.8 cm, 高さ 10.4 cm である。情報カードにはサルトウジュとあるが「쌀斗」は米をはかる升、または約 1 升の米の意であり、「쌀뒤주」と「뒤주」はほぼ同じ意味に使われているのであろうか。

前面のケヤキの板は 1 cm ほどの厚さで、およそ、幅 73 cm, 高さ 56 cm の 1 枚板が使われている。その表面は木理がくっきり浮ぶよう、平滑にされているが、裏面は鋸断したままのこん跡がある。

構造材はマツ材で、12 cm×6 cm の柱脚、13 cm×6 cm の前後の上框、10.5 cm×6 cm の側面の上框および下框の角材によって構成されている。角材には、8 mm の面取りが施されている。この重厚な構造材の接合はそれぞれ次のようになっている。

下端から 22 cm ほどあがったところに下框があり柱材に対し前面下框は「かおせ面肩付き通し平ほぞつぎ」であり、側面下框は「かおせ面肩付き 2 枚通し平ほぞつぎ」である。これらの関係は、「通し違いほぞつぎ」と呼ばれるものである。しかも側面下框の、前面、背面に貫かれた 2 枚のほぞの木口面にくさび状の部材があり、「くさび締めほぞつぎ<sup>18)</sup>」の状態になっていると考えられる。

上部の各部材は「上端留め形井桁組みつぎ<sup>19)</sup>」で、手のこんだものである。この部分は、部材の木目方向から見ると、後に一部、折れた部分を埋めなおしたと考えられる。

17) 板間には米櫃を置き、上には竜尊甒(竜文の壺)と白磁の壺を置く [朱 1981: 115] とあり、帝釈壺と祖先壺に対応させられる。

18) この場合の「くさび締めほぞつぎ」は通しほぞとほぞ穴のすき間にくさびを打ちこみ、ほぞの接合力を増すための接合法である。

19) 「上端留め形井桁組みつぎ」は継手、仕口の用語としてはあらわれないが、この組合された状態を表現するのに適当な言い方がなく、仮りにこう呼んでおく。しかし、この表現だけでも不十分で、更にいうならば「上端留め形変形井桁組みつぎ」とでもしなければなるまい。

この「上端留め形井桁組みつぎ」の仕口と、柱が底部から下に伸びている形が、大きな特徴である。

蓋板は、前の半分の板で幅 109 cm, 奥行き 35 cm, 厚さ 4 cm で、前面から押し上げて使うようになっている。3 cm×3.5 cm の断面の角材が蓋板の裏に 2 本、「鉄くぎ打付けつぎ」にされている。後の半分の天板は、井桁に組み込まれた上框に大きな「鉄くぎ打付けつぎ」になっている。

前面の錠前座金は、正方形と円形の枠を持つ 4 つの卍字文の透刻があるだけの簡素なものである。

側面、背面、底面ともマツ材の板で、側面板は横位置に 3 枚の板が使われ、背面は 2 枚はぎ合せで、手すきの紙が、そのはぎ合せ部分や柱、框材と板材の接合個所に目張りされている。

目張りはまた、内部の各隅部、底板、背板のはぎ合せ部分にもなされている。

底板は、厚さ 1-1.2 cm の板が 5 枚はぎ合せとなり、部分的に隅木を打ち付け、底板が抜け落ちないように補強しているが、全体として収納家具の底板の処理としては、不十分な感を与える。特に全体の構造に重量感があり、蓋板、天板は厚さ 4 cm もの板が使用されていることからみても、底部の処理が疑問を抱かせる。

#### 例 9 [標本番号] H0095327 小豆用櫃 [使用地] 大韓民国一帯

米櫃のミニチュア版で幅 38 cm, 奥行き 30.5 cm, 高さ 38.7 cm。情報カードには「パトウジュ (밭우주)」とある。米櫃とほぼ同じ形態、構造であるが、側面下框が「かぶせ面肩付き通し平ほぞつぎ」であるところに違いがある。

総てのほぞ木口面には、木口面の半ほどの長方形の部材がさし込まれている。

天板は上框に「竹くぎ打付けつぎ」で接合されている。蓋板と前面上框とは施錠用の金具はない。

底板の板厚は一定せず、下框に底板をさし入れる小穴の幅に合わせるため、木口部分の枝面を斜めに削り、側板も同じように、内側の小穴との接合個所は、板の端を斜めに削っている。

この小豆用櫃よりさらに小型のものを見たことがあるが、それは、板面、構造材の総て校倉造りの印象を与えるものであった。

塩野谷博治の『古箏筥百選』には、「穀物箏筥」として、ここで見た米櫃に食器、食品戸棚が下部についた幅 90 cm, 奥行き 47 cm, 高さ 93 cm のものが紹介されている。この構造材は細くきゃしゃなものになっているにも拘らず、井桁つぎの接合方

法は、形態として残存している [塩野谷 1980: 16-17]。

**例10** [標本番号] **H0095324** 食器食物保管用戸棚 [使用地] 大韓民国一帯 (付図5)

情報カードには「食器食物保管用戸棚, チャンチン」とあるが, 饌櫥 (찬장・chan-jang) の意かと思われる。三層櫥 (삼층장) と形態をさす呼び方も使用される。

饌櫥が置かれる空間は, 饌房 (찬방) もしくは, 饌房が別になく狭い住居では大庁である。この上には各種の小盤 (소반) が乗せられる [裊 1983: 38-39]。

この三層の食器食物保管用戸棚は幅 118 cm, 奥行き 56 cm, 高さ 170.5 cm で, 一番上の両脇に2つの浅くて奥行きの深い引出し (幅 22 cm, 奥行き 52 cm, 高さ 5.8 cm) がつき, 引出しの下端摺り棧は背板にほぞさしのかたちで出ている。

その下に3つの両開き扉がついた棚がある。この棚板間隔は上から順に高さ 45cm, 50 cm, 40 cm であるが, 扉板の高さが上段 42 cm, 中, 下段 28 cm という違いと横棧の配置でバランスをとっているように見える。

柱脚は 6.2 cm×3.7 cm の断面で, 天板の支輪に「通し平ほぞつぎ」で接合され, 支輪の回し縁は, たがいに「留め形通し平ほぞつぎ」となっている。脚部は足台 (족대) に「通し平ほぞつぎ」で接合されている。丸面を持った横木, 小束, 横棧などは剣留めになっているが, 主要な横棧は角材を使用しているのだから, 柱脚との接合は「剣留めほぞつぎ<sup>20)</sup>」であろう。しかし, 小さな鏡板 (小壁間・귀벽간) の間にある小束 (童子木・가루동자) は, ニカワで押えこむだけのものであり, これを黄銅くぎで固定している部分もある。

鏡板 (小壁間・귀벽간や敷居の下につける板の意味の머름간) は主要な骨組みの小穴に「追入れつぎ<sup>21)</sup>」のかたちで固定している。

天板, 側板, 背板などの「追入れつぎ」の個所は, 板の端部を斜めに削り出し, 小穴と板材の関係をなじませている。

扉框は留め形で, 両扉は簡単な鉄の円形蝶番で固定され, 中央部の右扉に取りつけられた鑲を左扉の留め金かけの状態になった小さな輪になった部分へかけると, これで扉のかけがねの役目を果たす。

20) 「剣留めほぞつぎ」は「剣留め柄」ともいい, *mitered shoulder mortise and tenon joint* で, 胴付き面がV字形になっているほぞつぎ。後述の「剣留め通し平ほぞつぎ」は, ほぞが, 接合する相手の材を貫いた状態をいう。

21) 「追入れつぎ」は *housed butt joint* で, 2枚の板をT字形につぐとき, または長い角材と板材をつぐとき, 一方の材, または板材の木口をそのままほぞとして, 他方の材, または角材に溝をつくってはめ合わせる接合法で, 接着剤を使う方法とくぎ打ちの方法がある。「大入れつぎ」ともいう。

この家具の扉の下の鏡板の裏側には 7 mm の板が打ちつけられ、部分的にフラッシュパネルの構造になっている。おそらく、食器の出し入れ時に横棧の部分に物がひっかからないようにするためであろう。

前面にはケヤキ、その他はマツの板材が使われている。

**例11 [標本番号] H0095327 食器保管用櫃 [使用地] 大韓民国一帯**

食器は饌櫃にも収納されるが、この例のような木の櫃にも収納された。情報カードには現地名として「구름궤」とある。直訳すれば容器櫃である。

銭箱の類よりひとまわり大きく、幅 88.8 cm、奥行き 50.7 cm、高さ 52.3 cm で、開閉する方法は銭箱のそれと同様である。

板材は底板を除き総て 1 枚板で、板厚は、前板、側板、背板は 2 cm-2.3 cm で、相互に「11枚あり組みつき」で、前板から菊花文座金つきの鋳で補強し、背板からも頭の大きな鋳で補強している。天板は厚さ 1.8 cm で、12個の鋳で打ち付けられている。蓋板は開閉時に板が横にずれないように裏側に 2 本の棧木が取り付けられている。

蓋板を開閉する時に、蓋の回転によってたえず摩擦を受ける側板の一部は摩耗して、くぼみができている。そして、ちょうど回転の軸にあたる蓋板の木端面も、まるくすり減っている。従ってこれは日常ひんぱんに使用されていたことが明らかである。こうした開閉機構のものは古くなれば、このように回転によって生ずるくぼみが顕著になる。

銭箱にも見られる蝶番と共にある蓋板の裏側の棧木の意味は、どういうことになるのだろうか。蝶番があれば、蓋板裏面の棧木は不要となり、また回転軸の位置が変わるため、板の摩耗はおきない。しかし、蝶番とこの棧木が併用されている。

おそらく、棧木を取りつけるタイプが古い技法であろう。そして、この棧木はとりもなおさず、蝶番と同様の役割りを果たしていたはずである。これに蝶番が取り付けられる時、この棧木はすぐには取りはずされない。蝶番のみで重い蓋板を回転させることへの不安定感から、蓋板の位置決め用の棧へとその機能を変化させたのではないだろうか。

さて、前板には錠前さしの金具があり、その座金は宝相華文に近いかたちである。

底板の板厚は最も厚く 2.4 cm で、「鉄くぎ打付けつき」で接合した上に望頭形 L 字形留め金具で補強している。この留め金具による補強は前面のみで、その他には用いられていない。

前板、側板上部に左右各 1 個 L 字形の細い留め金具があり、同じものが天板と側板

の補強にも使われている。

使用樹種はマツ（五葉）である。

#### 4. 舎廊房用家具

舎廊房用の家具や道具だては次のとおりである。

書櫛、卓子櫛、衣巨里、文匣、依枕、燈架、書燈、硯床、硯滴、筆筒、考備それに屏風、大坐榻、かけ軸、如意、扁額、茶かん、火鉢、平床などで、その他、碁盤、琴、尺八の趣味用品が置かれていた [褒 1983: 38]。

しかし衣巨里は置かれても、舎廊房に続く寢房にまれに質素なものが置かれるくらいであった。

#### 例12 [標本番号] H0089304 書類戸棚 [使用地] 忠清南道 (付図10)

同じかたちのものを2つ並べて使う書類戸棚を双文匣(쌍문함)という。この双文匣の単体について見てみると、幅 75.5 cm、奥行 28 cm、高さ 35 cm で、前面に使われている樹種は広葉樹環孔材でハリギリのように見える。その他はキリ材が使われている。

天板、側板、底板は 1.5 cm 厚の1枚板で、天板、両側板の接合は「大留めつぎ」もしくは「留め形かくしほぞつぎ」である。両側板と底板の接合は小穴に「追入れつぎ」である。これらの板の木端、すなわち前面は 1.5 cm × 2.3 cm の断面の面縁がある。背板は天板、側板、底板に「竹くぎ打付けつぎ」である。背板の内部は仕上げはなく鋸断のままである。

前面は4枚の「けんどん蓋<sup>22)</sup>」になっている。けんどん蓋といっても、実際にけんどん式に取りはずしできる位置は、右側から2番目の位置だけで、他は横にスライドさせて、取りはずすことになる。4枚とも幅が 18 cm の見えがかりになっているが、実は両わきの2枚のけんどん蓋は、側板面縁に 3 mm の溝があり、これにおさまって 18 cm にそろうようになるのであって、実際の幅は 3 mm 余分になっている。従って、けんどん蓋は並び方が決まっており、自由にどの位置にあってもよいということにはなっていない。

単純明快な形態とするために、このような配慮がなされていることに注目したい。

22) 「けんどん蓋」のけんどんは餛飩、蓋の開閉のしかたの1つ。上下（または左右）に溝があり、一方（上下ならば上）の溝が深くなっていて、蓋または戸をまず深い方へはめてから浅い方へもどす（あるいは落とす）やり方。和風の建具の敷鴨居に対するはめ方はこの理を応用したもの。「やりかえし」ともいう [成田 1977: 63]。

内部の上端には幅 16.5 cm, 奥行き 22.2 cm, 高さ 6.6 cm の引出しが4個横に並び, 引出しの両側の仕切りの面縁は「剣留めほぞつぎ」で接合され, 引出しの下端摺り棧は背板から「竹くぎ打付けつぎ」で止められている。

金具は, 前面のけんどん蓋の中央に黄銅の水仙花文取手金具が取り付けられ, 内部の引出しには天桃形<sup>23)</sup>取手がつけられている。

双文匣の高さと幅の比は並べた状態では1:4を超え, 水平に伸びる家具である。

### 例13 [標本番号] H0084773 書類だんす [使用地] 京畿道

乱れ文匣の現代版とも呼べそうな書類だんすで表面の塗装は新しい。幅 68.2 cm, 奥行き 41.2 cm, 高さ 48.6 cm である。

特徴は, 3枚のけんどん蓋であり, 前面上部に3個の引出しがつけられていること, そして, けんどん蓋は中央部でのみ取りはずしができること, さらにけんどん蓋をはずすと内部の上端部に3個の引出しがあることで, 文匣の基本的要素がそのまま踏襲され, その上に引出しが追加されていることである。

けんどん蓋は, 前例の双文匣の場合と同様, 両側板面縁に両脇のけんどん蓋が収まるような欠きこみがあり, それによって見えがかりを同じ寸法で見せている。

使用樹種は主要構造は針葉樹材であり, 表面の一部と引出しの内部にはキリが使われ, 表面の面張りには, 厚さ 0.2-1 cm の2種類の広葉樹材(1つはトネリコ属の環孔材, 1つは散孔材)が使われている。

金具は白銅の水仙花文座付天桃形取手金具が上部引出しとけんどん蓋にあり, 内部の引出しの取手は, 円形座付天桃形取手である。

### 例14 [標本番号] H0062543 文箱 [使用地] 大韓民国(付図6)

幅 93 cm, 奥行き 34.3 cm, 高さ 53.6 cm で, 甲板面を拡張すると幅 93 cm×奥行き 68.4 cm となる。

文匣に比べ高さも高く, 甲板拡張の機構があり, 両開き扉は両脇の引き戸にフランスヒンジ(落とし込み蝶番)で連結され, 引き戸は各々, 中央部にスライドできるようになっている。こうした機構のものは, 李朝後期には登場していたようである。内部の上端に浅い引出し(幅 21.6 cm, 奥行き 31 cm, 高さ 7.1 cm)が3個ならび, 引き戸の下端部の高さで, 側板, 前板, 背板に接して, 幅 15.8 cm, 奥行き 31 cm の

23) 中国では西王母の蟠桃(はんとう)は3千年目に一度実を結ぶといわれ, このことから桃は生命の果実で, 長寿を表象するものとみなされる。わが国では古事記にいざなぎのみことが悪鬼を桃で追いはらったとある [岡登 1968: 291]。

棚板があった。標本では棚板はないが、棚板受けの棧を受けるほぞ穴が背板内側の棧にあり、前板の裏側には「あり形かけつぎ」の形が残っており、棚受け棧木があったことを示している。

側板と甲板の接合部に設けられた風穴(풍혈)部分に、甲板を広げた時に下から支持する角材が前へ2本、背面へ2本引き出せるように格納されている。

基本的には文匣の機能をひきついだ形のようなのであるが、甲板部分の扱いが付加された形態である。

例15 【標本番号】 H0062542 文箱 【使用地】 大韓民国 (写真2)

民博に所蔵されている螺鈿漆器はこの文箱の他に、膳があり、また後述の裁縫箱も螺鈿である。

韓国において、現在も螺鈿の家具は好まれるものである。文箱ということで舎廊房の家具の項にいたしたが、螺鈿の文箱であれば内房用の家具として使われたとも考えられる。

螺鈿技術は11, 12世紀高麗時代にその絶頂期を迎えていた。李朝初期の意匠は、蓮唐草文、宝相華文、双鳳文、双竜文などが用いられ、高麗期の表現にくらべ、密度が乏しくなり、パターンは大型化され、中期では梅竹、花鳥などの意匠が優勢となり、

後期の19世紀に入ると螺鈿技法は小さきみなつなぎ合せが盛んとなり、したがって文様よりは自然描写が多くなり、十長生や山水を写実的に表現する傾向となる [崔 1974: 7]。



写真2 螺鈿の文箱

螺鈿漆器の工程は①素地研磨、②生漆塗り、③隙間埋め、④布張り、⑤下地(布地)塗り、2回、⑥砥石研ぎ、⑦貝張り、ニカワで張りつける。⑧糊取り=貝の表面についたニカワの汚れを取る。⑨生漆塗り=貝の接着を強める、⑩漆埋め塗り、2回、⑪砥石研ぎ=貝が現われて平滑になるまで研ぐ、⑫中塗り、⑬木炭研ぎ出し=イチョウ炭、⑭上塗り=精製漆塗り、⑮研ぎ出

し=小刀と木炭，⑯磨き=歯磨き粉を豆油に練り混ぜたものを使って綿で磨く，⑰艶出し=豆油で艶を出す [沈 1983: 4] の17工程である。

この文箱の螺鈿は、前面，側面，天板いずれも細かく切った貝による山水画であり李朝後期の特色を持つものである。背面は麻布に塗りが施された状態まで，つまり工程の④ないし⑤で止められている。

引違い戸になっているのはこの1点だけで珍しい例といえる。

板厚 1.5 cm の天板と側板は「3枚組みつぎ」で，背板は厚さ 0.8 cm の板の3枚はぎ合せである。引違い戸の框組は，「肩付き平ほぞつぎ」で鏡板（腹板）は框の小穴（溝）にさし入れられる。この鏡板も裏面には小穴に合せるために斜めに削った部分が認められる。引違い戸内部の棚板は奥行き 24.7 cm で，内壁全体に文字が書かれた手すきの野紙が張られている。

下部に2個のやや深めの引出しがあり，引出しの接合には鉄くぎが使用されている。使用樹種は二葉のマツである。

#### 例16 [標本番号] H0089323 本箱 [使用地] 京畿道（付図7）

この書櫥(서장)または冊櫥(책장)はちょうど二層櫥ぐらいのプロポーションで，幅 99.5 cm，奥行き 48 cm，高さ 124.2 cm である。

鏡板はキリの木理がくっきりでており，構造材は広葉樹環孔材で孔圏外にも道管が散在している。背板，側板はマツ材が使われている。

内部には中央に棚板が1枚あり，二層に書籍類を整理することができる。大きな扉は，上下の収納部分にまたがっており，扉を開ければ，ほぼ全体が見えるようになっている。

またヒズメ(족등)と呼ばれる脚部の形態も特徴的である。

天板部分支輪は「留め形通し平ほぞつぎ」で厚さ 1 cm ほどの天板は支輪の小穴に「追入れつぎ」となり，柱脚の上端部はそのまま天板支輪に 7 mm ほど入りこんでいる。それを支輪の上から，頭の直径 1 cm ほどの鉄くぎで7カ所打ちつけている。

柱脚はヒズメと柱の部分がひと続きになっている。1本の 6.5 cm の断面の角材から 3.7 cm 角に仕上げる部分とヒズメ部分を彫り出すという工程としては大変やっかいな要素を持っている。しかも 3.7 cm 角の柱は内丸，外丸ガンナを使わなければならない形状であり，ヒズメ部と柱部の際の仕上げには，相当時間を要しそうである。

前面の横棧や小束はすべて，「剣留めほぞつぎ」となり，この間を小壁間(귀벽간)，や敷居の下につける板(머름칸)という意味を持つ小板がはめこまれる。

両開き扉の框は「留め形3枚組みつき」で、鏡板(腹板・복판)がはめこまれる。鏡板の裏側は框の小穴にさし入れる部分は斜めに削られ「こかしばめ」のかたちである。

扉は各々3枚の黄銅の蝶番で連結され、中央部には、小さな花文座金の鑲がつく。

ヒズメと呼ばれる脚部の間は、風穴(풍혈)といわれるゆるやかなカーブの板がとりつけられている。

内部のマツ材の棚板は、厚さ1cm、奥行き37.7cmである。ちなみに民博に収蔵されている四書五経の冊子は22.7cm×34.7cmであり、短辺を手前にして積み重ねて収納すれば効率的である。

#### 例17 【標本番号】 H0084772 書類函 【使用地】 慶尚南道

幅55cm、奥行き32cm、高さ34.5cmで足台を除くと奥行きと高さはほぼ1:1となる。材質は底板がマツで、他はクリ材である。

書類函は、簡単な構造で、蓋と身が2つの蝶番で連結されたもので、印籠蓋のかたちである。前板、側板、背板の接合は「あり組みつき」で板厚は6-7mmである。蓋の天板は、かぶせ蓋、底板も同様の接合である。前板、側板、背板と蓋板および前板、側板、背板と底板の接合方法は不明だが、折れ金具打付け個所の見えない部分は、竹くぎによって接合されているのかも知れない。

金具は黄銅で、2個の簡単な長方形の薬莖形蝶番が背面にあり、前面の蓋板、身の前板にまたがって円形座金付錠前さし金具がある。その下部、前板中央部には、花形文座金付の半月形取手がつき、取手が板と直接あたらないように、こうもり文とも蝶文とも見える座金が配してあり、各板材は、39個の菱形の折れ金具によって固定されている。

底板の下には、1cm×3cmの断面の角材が2本取りつけられている。

#### 例18 【標本番号】 H0084771 書類函 【使用地】 慶尚南道

幅55.5cm、奥行き28cm、高さ36.5cmで軽い箱である。

板厚はすべて7-8mmで、前板、側板、背板の接合は「9枚あり組みつき」で、これに蓋板、底板を「竹くぎ打付けつき」で接合している。

板材は、蓋と身が連続した木理であることを示している。

底板と、印籠蓋にするため、身の内側上端に竹くぎで取り付けられた付け面の一部を除いて、すべてキリの板が使われ、その木理を出すため、焼けた金ごてを材面にあてて焼きその後、ブラシをかけて木理を強調した仕上げとしている。

底板の下は、四隅に厚さ 8 mm ほどの小さな直角三角形の板が接着されている。  
黄銅の金具は、背面の蝶番 2 個と、前面の円形座金付錠前差しと、弓形の取手のみである。

#### 例19 [標本番号] H0089321 書類棚 [使用地] 京畿道

四方卓子(사방탁자)は舎廊房に置かれるきわめて簡素な棚である。書類と共に盆栽や器物も置かれる棚で、下部に両開き扉のついたものや、引出しのついたもの、あるいは中段の引出しや両開き扉のついたものもある。

各部材が、きわめて細く、黒っぽい仕上げであるため、白い紙張りの壁の前で強いコントラストとなる。

この四方卓子は幅 49 cm、奥行 44.5 cm、高さ 168.5 cm で、幅と高さの比は 1 : 3.44 ですらりとした垂直に伸びる家具である。双文匡が水平線を強調する家具だとすれば、四方卓子は、垂直に伸びる線を持つ家具であり、これらが、舎廊房の端然とした雰囲気演出するものだと言えよう。

4本の柱は 2.9 cm × 2.9 cm の角材で、天板と棚板と4本の柱をつなぐ横木(쇠목)は 2 cm × 2.9 cm の断面で柱と横木の接合は「剣留めほぞつぎ」で、底の部分は「留め形ほぞつぎ」になっている。

天板部分の構造材の仕口は、「三方留めつぎ」だが、柱と横木のサイズの違いがあるためその接合線は少し変わって見える。この接合線のかたちから通常の「三方留めつぎ」とは異なる方法がとられていると考えられる。しっかり接合されているので詳細を確定し難いが、考えられる仕口はかくしほぞを有するかそうでないかの2種類であろう。

棚板は、引出しの底板と同じく層板(층널)と呼ばれる。この層板は天板も含めて、キリの 6 mm 厚の板であり、「こかしばめ」であり、天板を除く層板はすべて2枚はぎ合せで、天板のみ1枚板である。

最下段の棚の下には幕板にあたる板風穴があり、柱脚は前後に足台(족대)で連結されている。この部分の接合は「肩付き通し平ほぞつぎ」だが、ほぞの位置が、柱脚の真中に来ず、外側にふれている。

構造材は広葉樹散孔材である。

#### 例20 [標本番号] H0089322 本棚 [使用地] 京畿道

作られたのはそう古くない印象のこの本棚は、ソウルの国立中央博物館蔵の三層饌

卓(삼층찬탁)と少しプロポーションが異なるだけで、同じような形態である。この本棚は幅 119.2 cm, 奥行き 32.5 cm, 高さ 149.7 cm で三層饌卓は幅 89 cm, 奥行き 34.8 cm, 高さ 156 cm で、棚板の木目方向が異なるのと側面の横木下に幕板がついている点が違う [崔 1974: 115]。

天板支輪は前面が「留め形通し平ほぞつぎ」、後部は「肩付き通し平ほぞつぎ」で、この支輪に 3.4 cm×5.3 cm の断面の柱材が「肩付き通し平ほぞつぎ」で接合され、各棚の杵木は柱に「剣留め通し平ほぞつぎ」となり、これに「くさび締め」が使用されている。また、側面の杵木は柱材に「肩付き平ほぞつぎ」で接合され、棚板はそれぞれの杵木の小穴に「追入れつぎ」となり、棚板の端の部分は斜めに削られ「こかしばめ」となっている。

前面の柱材と杵木(横木)は脚部で言えば風穴のような小板で縁取りされている。

柱材は、樹脂道がごくわずかなマツで、つまり五葉のマツで、これがチョウセンゴヨウマツと呼ばれるものであると考えられる。

棚板は、総て樹脂道の明らかな二葉のマツである。

## 5. 内房用家具

内房をしつらえる道具だてはおおむね次のようなものである。単層櫛、層櫛、衣巨里、パンダジ(半開)、函、櫃、文匣、卓子、彩箱、柳箱、竹の行李、梳匣、鏡台、火鉢、燭台、針箱(裁縫箱)などであり、その他、屏風、すだれなどが配される [裴 1983: 36]。従って、文匣、卓子は舎廊房にも内房にも登場する家具ということになる。

### 例21 [標本番号] H0067445 貴重品入れ [使用地] 大韓民国(付図8)

民博には同形の貴重品入れが2個所蔵されている。同じ形ではあるが、前板のつり上げ戸(ちょうど分閣門・ブナプムンのように<sup>しとみ</sup>鄣式につりあげる戸)の透かし彫り文様は同じモチーフで異なる表現となっている。従って、一セットとして作られ、使われたものであろう。

大きさは幅 62.7 cm, 奥行き 33.5 cm, 高さ 72.7 cm と小じんまりした大きさである。

情報カードには「全州櫛と同じく머리장の一種で身のまわり品や貴重品を入れる家具」とある。これは、枕もとに置かれるタンスである。

天板は 4.3 cm×2.2 cm の支輪が「上端留め形3枚組みつぎ」に接合され、本体部

分(胴体・몸체)の構造材は互に「剣留めほぞつぎ」になり、馬台(마대)と呼ばれる脚部は、大板(대판)という底板と風穴、4本の脚すなわちヒズメと足台という前後の脚をつなぐ台によって構成されている。

柱材と主要な横木はギボシ形の先端を持つ帯金具、つまり望頭形留め金具で固定強化され、横木と小束、童子木は先端が花形文になったT字形の細い金具(새발감잡이)によって接合が強化されている。

この構造材にかこまれた鏡板には眼象文、如意頭文が彫刻されている。

天板、馬台のそれぞれ前面両脇の部分は隅金具でとめられている。つり上げ戸は、簡素な蝶番によって連結され、支輪下中央部の鎖によってつり上げ固定される。このつり上げ戸の透かし彫り文様のモチーフは、松、瑞雲、双鹿、不老草と岩である。透かし彫りの透けた部分にはうしろから紗が張られている。

内部の特徴は、その収納部が2層になっていることで、下部の収納部に物を入れたり、出したりするには、層板の前中央部に設けられた幅 23 cm、奥行き 17.5 cm の蓋をとりはずさなければならない。この蓋板と層板は全く同一平面であり、この上にちょっと物を置いてしまうと、他の人には、2層の収納部になっているとはわからないしかけである。従って貴重品は、つり上げ戸を開けたらすぐに見える位置ではなく、蓋板の下に収納するのであろう。

## 例22 [標本番号] H0095246 衣裳たんす [使用地] 忠清南道(付図9)(写真3)

情報カードには「官服櫥(관복장)であり、位の高い人の官服をしまう」とある。こうしたたんすは、衣桁たんす(의걸이장)とも呼ばれるものであり単に의걸이ともいわれる。

主要寸法は幅 81.5 cm、奥行き 44.7 cm、高さ 166.8 cm である。

このたんすは、衣類をたたんで収納する構造ではなくて、洋服たんすのように内部に断面八角形の衣桁がついている。衣桁の高さは内法で 126.8 cm で、赤い色が塗られている。また、内部の背面の上端部には2カ所鉄くぎが打ちつけられており、衣桁の補助的な役割りを果たすハンガーではないだろうか。

内側は全面紙張りである。

両開き扉はそれぞれ、隠し蝶番3個が取り付けられ、本体の上部および下部の鏡板には眼象文が彫刻されている。

扉の鏡板は紙張りとな下の方の一部は紗張りで、この紙の部分に十長生が描かれている。この絵に描かれた十長生は、日、雲、岩、双鶴、水、双亀、松、双鹿と不老草

(靈芝)までは明らかであるが、小さく描かれた繁茂する木々が何であるのか判別できない。梅林だろうか。

構造材は天板部で「三方留めつぎ」、背板、側板、前面の横木や小束は「剣留めほぞつぎ」である。扉の框(門辺子・문변자)は「上端留め形3枚組みつぎ」で、中央に角のくびれた方形の鑲(葉菓形鑲)がある。

構造材は小さな面取りや面の小さな持ちあげが見られ、また脚部には簡素な風穴が見られる程度で全体としては簡潔なつくり方であるが、鏡板の十長生の色調は強烈な印象を与える。

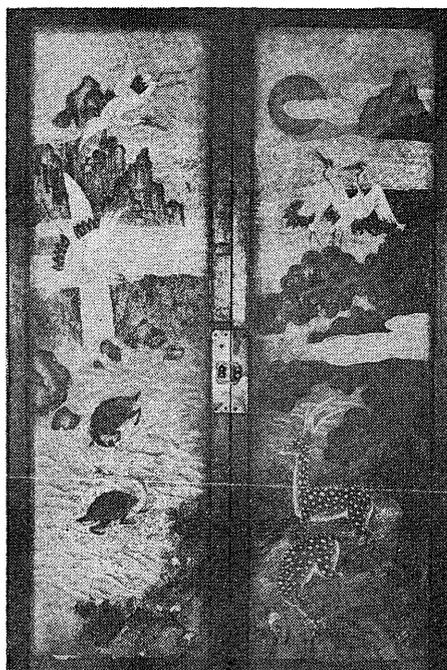


写真3 衣裳だんすの両開き扉に描かれた十長生

例23 [標本番号] H0095253 チョクトリ入れ用函 [使用地]大韓民国一帯

幅 48.5 cm, 奥行き 27.5 cm, 高さ 28.4 cm。

情報カードには「簇頭里函(족두리함), 儀式用女性冠を入れる函。また外側に長いかんざしを置く。」とある。現地名はチョクトゥリハム(chokturiham)である。

外側は黒漆, 内部は朱漆で, 蓋と身は印籠蓋の関係で, 簡素である。蓋の天板の縁部は丸味がとられ, 蓋は全体としてふっくらとした印象を与える。蓋の天板と側板は「竹くぎ打付けつぎ」で, 身の各板の接合も同様である。

蓋を開けると, 厚さ7mmの仕切り板によって5つに仕切られた, 浅い, 取りはずしができる箱があり, 情報カードにある「外側に長いかんざしを置く」というのは, この箱にかんざしが納められるものだということである。

この浅い箱を取りはずすと, 身の内部は, 高さ14cm, 厚さ7mmの固定の仕切り板があり, この部分にチョクトゥリが入られる。

主要な板の厚さは8mmから9mmで, 「竹くぎ打付けつぎ」による接合の上に, 38個の黄銅の折れ金具を各面に配して強化している。蓋と身は燕尾形蝶番2個で連結され, 前面は, 円形座金の蓋の方に錠前差し(뿔침대)が蝶番状に固定され, 小さな錠

車 国立民族学博物館所蔵の韓国の収納家具

前がかけられるようになっている。

**例24, 25 [標本番号] H0095251, H0095252 装身具入れ用函 [使用地] 大韓民国一帯**

この函の大きさは幅 22.7 cm, 奥行き 14.0 cm で, 装身具用の小箱は一般的に多様になり装飾も豊富になるものが多いが, これは比較的単純なつくりである。

情報カードには「現地名 佩物函(패물함)」とあり, 重さが 640 g と 680 g である。朱漆塗りに黄銅金具の小箱で, 固定展示であるため, 内部の状態は未調査である。

全体の接合は「竹くぎ打付けつぎ」で板厚は 6-7 mm 程度のものである。

**例26 [標本番号] K3135 糸櫃 [使用地] 大韓民国**

幅 30.5 cm, 奥行き 20.1 cm, 高さ 20.5 cm。

朱塗りというより, 少しベンガラ色に近いこの糸櫃は, 使用樹種がマツで, 板厚 7 mm 程度である。各部材は「竹くぎ打付けつぎ」の接合法で, 蓋と身の合せは印籠蓋のかたちになっている。

黄銅の線刻文のある円形座金を持つ錠前用金具が前面にあり, 背面には薬蕨形と燕尾形の蝶番 2 個で身と蓋を連結している。蓋の上面は面取りがあり, やや蓋板が盛り上がった形となって見える。

**例27 [標本番号] H0063840 裁縫箱 [使用地] 大韓民国**

幅 36 cm, 奥行き 36 cm, 高さ 8.5 cm の盆を少し深くしたぐらいの裁縫箱は螺鈿が施されている。側板の 4 面にそれぞれ, 竹と石, ばたんの花に蝶, 柳の木に魚, 五弁の花に鳥が描かれている。この螺鈿はかなり良く残っているが黒漆ははげ落ちたところが多い。

この中に入るものは, ものさし, はさみ, 糸まき, 針さしなどであろう。

側板はそれぞれ「7枚ほぞ組みつぎ」で, 側板の上端は幅 12 mm, 高さ 7 mm のつけ面があり, これは互いに「留めつぎ」である。底板は竹くぎで側板に打ち付けられている。

上から見ると底板のコーナーの部分に, 仕切り板があったと思われるあとが見える。小さなものを区画して入れた部分だろうか。

使用樹種は針葉樹である。

**例28 [標本番号] H0019486 箱鏡 [使用地] 慶尚南道 (付図11)**

幅 15 cm, 奥行き 20 cm, 高さ 11.7 cm。

この箱鏡は厚さ 1-1.2 mm のカキノキのツキ板張りになっている。板材は基材とツキ板あわせて厚さ 7-9 mm で、前、側、背板は「大留めつき」であるが隅木はなく、各隅は竹くぎの打ち付けと、黄銅の隅金具で接合されているように見える。

上蓋は背板に蝶番で取り付けられ、手前から押し上げるようになっている。さらに上蓋は2つに折れ、上蓋の裏面にくぎで止められた 18×13 cm の鏡板が箱の上に角度調節ができるように立てられる。ガラスに箔張りの鏡を立てるためには鍵が必要である。上蓋の2つ折れ部分、及び背板との蝶番は打ち抜き文のある燕尾蝶番であり、錠前座金には卍字文が打ち抜かれている。

鏡の下は引出しが一個ついているが、引出しの前板は、全体の「大留めつき」を崩さないよう、留めつきあわせのかたちとなり、コ字状取手がついている。引出しの内部は仕切り板はなく、総てマツ材で、底板は「竹くぎ打付けつき」である。この底板も木目方向が、引出しの出し入れ方向と直交している。

両側面に、使用時の指の位置を示す部分があり、一定の持ち方によって移動させられていたことがわかる。

重量は 1.1 kg である。

この資料の情報カードには現地名 hamsecken とある。これは함석쟁・箱石鏡のことで、石鏡という表現がおもしろい。つまり金属の鏡ではなく、ガラスという「石」製という意味であろう。

## 6. 葉 だ ん す

葉だんすは漢方医にとってなくてはならないものであり、中国、韓国、日本に共通して見られるものである。漢方薬は中国では4000年前から使われており、朝鮮半島に紹介されたのは、2000年前、新羅初期の頃であるといわれている。そして、中国の本草学に基礎を置き、独自の本草学を発展させたという [国立民俗博物館 1982: 168]。

韓国国立民俗博物館には漢医が脈をとり、一方で薬剤を調合している場面の展示がある。その道具では、薬機(약장), 薬材を切るはさみ=鋏刀(협도), 薬液を絞る木製の絞り器=(약틀), 薬湯缶(약탕관), 薬材を入れ吊り下げておく薬封紙(약봉지)や薬研=薬碾(약년), そして経血図, 9種類の針などである [国立民俗博物館 1982: 142-144]。

### 例29 [標本番号] H0089427 葉だんす [使用地] 京畿道 (付図12)

大きさは幅 87 cm, 奥行き 34.4 cm, 高さ 100 cm でカードには薬機(약장)とある。



トだと言うことができよう。

この葉だんすの天板は厚さ 1.4 cm の 1 枚板で、左後の隅に継ぎ板がある。両端は「胴付きこかしばめ」だが、さねが直角に作られず、わずかに胴付き面に対しこう配を持っている。

天板と側板は、「竹くぎ打付けつぎ」で、側板面縁と支輪は、「留めつぎ」になっている。けんどん蓋の上の横棧は側板面縁に対して「剣留めほぞつぎ」で、引出しを分ける縦横の棧木は、その先端部では「かくしほぞつぎ」で中間は格子にするための組手になっている。半丸面の棧木であるため、少し複雑な組手断面となっている。

けんどん蓋は 4 枚で、敷居にあたる部材と鴨居にあたる部材には 1 本の溝がある。右側から 2 番目のけんどん蓋の部分で取りはずしができるようになっている。この位置のけんどん蓋には施錠金具が取り付けられていた。この取手金具にだけ鍵穴があり、左側のけんどん蓋にはカンヌキを受ける穴がある。この突き出たカンヌキを鍵で引っこめてはじめて蓋板が 1 枚取りはずせる仕組みになっていたのである。

底部の 2 つの引出しの底板は、その張り方の木目方向が、出し入れのスライドする方向に対し直角方向である。

金具は、引出し取手の鑿が 49 個と、けんどん蓋と底部の取手金具 6 個のみである。

### 例30 [標本番号] H0067447 葉だんす [使用地] 大韓民国

幅 52.7 cm, 奥行 27.2 cm, 高さ 84 cm。

前述の葉だんすより小振りで、漢薬房にあったものとも言えるが、上層階級の家に置かれていた可能性も皆無とはいえない<sup>24)</sup>。

天板、側板、底板は総てキリ材だが、その面縁は異なっている。底板は側板に「散らしほぞ組みつぎ」のかたちで接合されているが、天板と側板の接合は、「13枚あり組みつぎ」である。天板、側板、底板の面縁は、まず、互いに「3枚あり組みつぎ」、「剣留めほぞつぎ」で接合され、後に板材に斜めから「竹くぎ打付けつぎ」としている。

両開き扉は、框が互いに「留め形 3 枚ほぞつぎ」で接合され、鏡板はキリ材で裏面の上下が斜めに削られ、「追入れつぎ」で框にはめこまれている。

両開き扉を開けると、その内部には 10 段、4 列の小引出しが並び、最下部は両脇に 2 つの小引出しがあり、中央に 4 つの仕切り板を持つ引出しが 1 個ある。細長い小引出しには、前後に区分する仕切り板があり、全部で 88 種類の薬が保管されるようにな

24) 「富裕な地主達は、彼らの住居にさまざまな薬を保有していた」[WICKMAN 1980: 79]。

っている。

小引出しに書かれている2つの薬品名は、前述の薬だんすと同種のものが多いが、併記されている2つの薬品名が合致する引出しの数は6個である。

これらの引出しの受け棧は、背板を「通し平ほぞつぎ」で貫いている。背板は厚さ7mmの「3枚はぎ合せ」の板で、天板、側板、底板に「竹くぎ打付けつき」で接合されている。

### Ⅲ. 考 察

#### 1. 形態について

パンダジは表1の例1, 2, 3であるが、その幅と奥行きのプロポーションは、例

| 分類   | 番号 | 標本名       | 使用地    | 現地名           | 主要寸法:(cm)<br>幅(W)×奥行(D)×高さ(H) | 比例<br>W : D : H <small>00=足台含む</small>        |
|------|----|-----------|--------|---------------|-------------------------------|---|
| 内(舎) | 1  | タンス       | 大韓民国   | 반 단 이         | 100.5 × 50.4 × 70.4           | 2 : 1 : 1.30(1.40)                            |
| 内    | 2  | 貴重品入れ     | 京畿道    | 〃             | 96.0 × 45.0 × 78.6            | 2 : 0.94 : 1.55(1.64)                         |
| 内    | 3  | パンダジ      | 済州島    | 〃             | 86.7 × 44.5 × 73.5            | 2 : 1.03 : 1.63(1.69)                         |
| 舎    | 4  | タンス       | 大韓民国   | 머 리 장         | 90.0 × 38.8 × 95.0            | 1 : 0.43 : 1 (1.06)                           |
|      | 5  | 銭箱        | 慶尚道    | 돈 껍           | 63.2 × 31.7 × 35.2            | 1 : 0.50 : 0.53(0.56)                         |
|      | 6  | 銭箱        | 京畿道    | 돈 껍           | 87.0 × 41.8 × 37.8            | 1 : 0.48 : 0.39(0.43)                         |
|      | 7  | 銭箱        | 大韓民国   | 돈 껍           | 63.5 × 40.0 × 40.0            | 1 : 0.63 : 0.63                               |
| 大、櫃  | 8  | 米櫃        | 大韓民国   | 뒤 추 (세 뒤 추)   | 108.9 × 66.8 × 104.0          | 1 : 0.61 : 0.96                               |
| 大、櫃  | 9  | 小豆用櫃      | 大韓民国一带 | 밭 뒤 추         | 38.0 × 30.5 × 38.7            | 1.25 : 1 : 1.27                               |
| 大、櫃  | 10 | 食器食物保管用戸棚 | 大韓民国一带 | 찬 장(饌櫃)・상 중 장 | 118.0 × 56.0 × 170.5          | 1 : 0.47 : 1.44(1.54)                         |
| 大、櫃  | 11 | 食器保管用櫃    | 大韓民国一带 | 그릇 껍          | 88.8 × 50.7 × 52.3            | 1 : 0.57 : 0.54(0.59)                         |
| 舎(内) | 12 | 帯類戸棚      | 忠清南道   | 쌍 문 껍(双文匣)    | 75.5 × 28.0 × 35.0            | 1 : 0.37 : 0.46                               |
| 舎(内) | 13 | 帯類だんす     | 京畿道    |               | 68.2 × 41.2 × 48.6            | 1 : 0.60 : 0.66(0.71)                         |
| 舎    | 14 | 文箱        | 大韓民国   |               | 93.0 × 34.3 × 53.6            | 1 : 0.38 : 0.54(0.58)<br>天板除く 1 : 0.5 : (0.7) |
| 舎    | 15 | 文箱        | 大韓民国   |               | 66.0 × 31.0 × 90.5            | 2 : 1 : 3                                     |
| 舎(内) | 16 | 木箱        | 京畿道    | 서 책 장 帯 櫃     | 99.5 × 48.0 × 124.2           | 1 : 0.48 : 1.06(1.24)                         |
| 舎    | 17 | 帯類函       | 慶尚南道   |               | 55.0 × 32.0 × 34.5            | 1 : 0.58 : 0.60(0.62)                         |
| 舎    | 18 | 帯類函       | 慶尚南道   |               | 55.5 × 28.0 × 36.5            | 1 : 0.50 : 0.65(0.66)                         |
| 舎(内) | 19 | 帯類棚       | 京畿道    | 사방탁자(四方卓子)    | 49.0 × 44.5 × 168.5           | 1 : 0.90 : 3.11(3.44)                         |
| 舎    | 20 | 木棚        | 京畿道    |               | 119.2 × 32.5 × 149.7          | 1 : 0.27 : 1.25(1.37)                         |
| 内    | 21 | 貴重品入れ     | 大韓民国   | 머 리 장         | 62.7 × 33.5 × 72.7            | 1 : 0.53 : 1 (1.15)                           |
| (内)越 | 22 | 衣裳だんす     | 忠清南道   | 관복장(官服櫃)・이견이  | 81.5 × 44.7 × 166.8           | 1 : 0.54 : 1.93(2.04)                         |
| 内    | 23 | チョクトリ入れ用函 | 大韓民国一带 | 족두리함(簪頭里函)    | 48.5 × 27.5 × 28.4            | 1 : 0.56 : 0.56(0.58)                         |
| 内    | 24 | 装身具入れ用函   | 大韓民国一带 | 패 물 함(佩物函)    | 22.7 × 14.0 × 14.2            | 1 : 0.62 : 0.63                               |
| 内    | 25 | 装身具入れ用函   | 大韓民国一带 | 〃             | 22.8 × 14.0 × 14.2            | 1 : 0.62 : 0.62                               |
| 内    | 26 | 糸櫃        | 大韓民国   | 실 껍           | 30.5 × 20.1 × 20.5            | 1 : 0.66 : 0.66(0.67)                         |
| 内    | 27 | 袋縫箱       | 大韓民国   |               | 36.0 × 36.0 × 8.5             | 1 : 1 : 0.24                                  |
| 内    | 28 | 箱鏡        | 慶尚南道   | 함 석 경(箱石鏡)    | 15.0 × 20.0 × 11.7            | 1 : 1.3 : 0.78(3/4:2.30)                      |
|      | 29 | 薬だんす      | 京畿道    | 약 장(薬櫃)       | 87.0 × 34.4 × 100.0           | 1 : 0.40 : 1.04(1.15)                         |
|      | 30 | 薬だんす      | 大韓民国   | 약 장(薬櫃)       | 52.7 × 27.2 × 84.0            | 1 : 0.52 : 1.46(1.59)                         |

表1 収納家具の主要寸法と比率

1が2:1, 例2が2:0.94, 例3が2:1.03でほぼ2:1となっている。これに例4のタンス(全州織)と同じく例21の貴重品入れの幅と奥行きの関係を見ると例4が1:0.43=2:0.86, 例21が1:0.53=2:1.06で, 使用目的が類似する5点を比較すると, 例4の場合奥行きが浅いという点はあるが, ほぼ2:1の比率である。例4のタンス(全州織)の場合, 使用機能が前面に並列的にならべられる。つまり, パンダジに内蔵されている引出しは表面にはりつき両開き扉も付加されるなど, 奥行きが浅くて済む条件がそろっていることが挙げられよう。

例4(付図2)のタンス(全州織)と例21の貴重品入れはともに머리장と呼ばれるが, この二つの形態は雰囲気や引出しの有無, 扉の開閉のしかた, 収納方法などの点で異質な点が多い。ところが, 脚部を含めた幅と高さの比率が例4は1:1.06, 例21が1:1.15で, 脚部を除いた本体部分の幅と高さの比率は例4が1:1, 例21も1:1となる。パンダジが, 幅と奥行きに2:1という特徴を持つとすれば, 머리장(mo-richang)は幅と高さが1:1のプロポーションを持つものだと言えそうである。

銭箱は台を除く幅と奥行きと高さの比率は例5が1:0.5:0.53, 例6が1:0.48:0.39, 例7が1:0.63:0.63である。銭箱は例6の場合がやや離れているが, 奥行きと高さが1:1に近いことがわかる。また, 銭箱と同様箱形で板材によって構成されるものは例11の食器保管用櫃, 例17, 18の書類函, さらに小型の例23のチョクトリ入れ用函, 例24, 25の装身具入れ用函, 例26の糸櫃を並べてみるとどうであろうか。これらの台を除いた本体部分の幅, 奥行き, 高さの比率を並べてみると, 例11 1:0.57:0.54, 例17 1:0.58:0.6, 例18 1:0.5:0.65, 例23 1:0.56:0.56, 例24 1:0.62:0.63, 例25 1:0.62:0.62, 例26 1:0.66:0.66となり, ほぼ奥行きと高さが1:1になる。

もちろん, これらの箱はサンプルも少なく, 大きさも, その役割りも違うので単純に, 箱, 函, 櫃などは, 奥行きと高さの比が1:1であるとはいえないが, このプロポーションは一つの傾向として注目しておきたい。

米櫃の幅, 奥行き, 高さのプロポーションは1:0.61:0.96で, 蓋板と天板をあわせた平面形は, 幅と奥行きが黄金比<sup>25)</sup>になっている。

天板, 蓋板を除いた柱脚の幅と総高の比率は1:1.09でわずかに縦長だが, ケヤキの鏡板の幅と高さの比は1.29:1と幅が広がっている。こうしたことから言えるこ

25) 黄金比は1:0.618……の比で, 自然界およびギリシャ美術などに, この比に近いものがしばしば見られる。2辺の比が黄金比をなす長方形は最も形の良い長方形といわれている。ドイツの美学者ツァイジングは経験によって同じことを唱え, 心理学者フェヒナーとヴントも大部分の人は無意識に黄金比の寸法のものを好んで取るという[清宮 1976: 163]。

とは、やや縦に長いかたちを、高さより長く上框の井桁と蓋板、天板を張り出させることで、安定感を与え、さらに上框、下框、柱脚で囲まれる外形のプロポーションが幅：高さ＝1：1.1と縦長になっているところを鏡板を逆に横長にさせることでバランスをとっていることである。

特に正方形はそのまま見ると少し縦長に感じられるものであり、このような視錯覚（錯視）を補正してなお、安定感を与える範囲にまで幅を広げたかたちとなっている。こうした正面の形状をとってみても、造形的にきわめて注意深く配慮されたものだと言える。

こうした点は小型の例9の小豆用櫃では見られず概念的な部材寸法の押え方となっている。

例10（付図5）の食器食物保管用戸棚は幅：奥行き：高さが1：0.47：1.44である。だが、天板の支輪のでっぱりを除くと幅、奥行き、高さの比は1：0.49：1.54である。さらに高さのうち足台を除くと1：0.49：1.5となる。つまり基本的な形状を2：1：3と見たてて形をつくっていったことがわかる。横棧の配置の仕方は微妙に寸法が異なるが、全体として見た時、面分割は巧みにバランスをとっていると感じられる。

両開き扉は、開けると幅60cmの開口部となる。ちなみにわれわれは、1人用のテーブルという時に幅60cmを最小かつ妥当な寸法として採用するが、一人の人間がもの出し入れをする時、60cmの開口部があれば一応作業は行えるものである。しかし開口部を例えば、例22の衣裳だんすのように広くとらない点は疑問の残るところであるが、おそらく、構造的な配慮からではないかと考えられる。一つは本体の剛性を高める必要から前面の開口部を少なくしたいという意図と、扉が幅広くなればそれだけ蝶番にかかる荷重が大きくなるということ。こうした問題点を解決する寸法として選択されたものと思われる。例16の本箱の場合も、同様な開口部の扱いである。特に食器食物保管用戸棚は毎日くり返し開閉するもので、剛性を高めることは重要なことであった。

例12（付図10）の書類戸棚はあくまでも水平の線が強調されるものであり、天板は飾り棚であった。高さ35cmというのは、平座の状態で、飾ったものがよく見える高さであり、一方窓の下の腰壁の高さによっても規定されたのではないだろうか。つまり窓の下端の高さで揃え、夏は窓を開け放てば、頑賞品と共に自然を舎廊房に取り込めたはずである。

例13の書類だんすは幅：奥行き：高さは1：0.6：0.66(0.71)で、箱としてのプロポーションに近い。

例14の天板拡張式の文箱は、天板を除くと幅：奥行き：高さが1：0.5：0.7で、幅と奥行きの比率がパンダジの場合と同様2：1である。甲板とその下の部分の寸法に開きがあると、経机、文机の場合と同じように横に伸びた甲板の下、側板の脇に脚部と同じ名称の風穴という曲線の板があてられる。いわば、甲板の補強材であるが、一面、ある種の充てん文様のようにも受けとれる。

例15の螺鈿の文箱のプロポーションは幅：奥行き：高さ＝2：1：3である。

例16の本箱は幅：奥行き：高さ＝1：0.48：1.24 $\div$ 4：2：5、脚部を除いた比率は1：0.48：1.06 $\div$ 2：1：2で、ほぼ整数比となっている。従って、見たところ、箱の本体部分は、やや縦長となっている。これをふんばったような脚部の処理によって、また風穴の曲線によって安定させている。

例19の書類棚は双文匣との対比としての垂直の家具だとすでに述べたが、垂直線も細ければいよいよ効果的である。かといって細すぎればゆがみを生じやすい。そこで、各フレーム材の角の部分の面取りし、角材が細く見えるように処理している。この場合は、横木と連続させる面をとり軽快にしている。例22の衣裳だんすの場合も同じような手法が見られ、フレーム材を軽快に見せようとする意図が共通している。

収納家具は、物を出し入れするものである。当然そこには、開閉の方法がなければならぬ。ところで、この30例の中で開く時にその部分を回転させて下ろすタイプの扉、仮りに「下ろし扉」とすると、これが4例、けんどん式の蓋板があるものが3例、天板の半分を押しあげるものが6例、蓋全面を蝶番でつなぎこれを回転させて開くものが6例、つりあげ扉が1例、引違い戸が1例、両開き扉を持つもの6例、引出しを持つもの10例で、隠し蓋とでも呼べそうなものが1例である。そして引違い戸ではないがそういう操作のできるものが4例（けんどん蓋を含む）である。

錠前は多くの家具についているが、明らかに錠前さしがあって施錠できるかたちになっているものは19例である。こうしてみると、生活財を管理するという考えが錠前によって象徴的に示されているといえるし、自らと他を区別する意識のあらわれともいえる。収納家具は錠前がつくことで完結するものであり、階層意識のあらわれともみられるが、自らと他を区別する意識を家具に投影することによって、個々の精神的な世界を隔離する装置であるように思われる。

## 2. 構造について

30点の家具についてどのような部材の接合法がとられているのか、以下、表2に従って見てみたい。

車 国立民族学博物館所蔵の韓国の収納家具

| 例  | 標本名       | 接合法 |    |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 計 |
|----|-----------|-----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|    |           | a   | b  | c  | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m  | n | o | p | q | r | s | t | u | v |   |
| 1  | タンス       | ●   | △  | △  | ● |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   | ● |   |   |   |   |   | 3 |
| 2  | 貴重品入れ     | ●   |    | ●  |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   | ● |   |   |   |   |   | 3 |
| 3  | パンダジ      | ●   | △  | ●  | ● |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3 |
| 4  | タンス       | ●   |    | ●  | ● |   |   |   |   |   |   |   | ● |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 4 |
| 5  | 銭箱        | ●   | ●  | ●  |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3 |
| 6  | 銭箱        | ●   |    | ●  |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2 |
| 7  | 銭箱        | ●   |    | ●  |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2 |
| 8  | 米櫃        |     |    | ●  |   |   |   |   |   |   |   |   | ● | ●  | ● | ● |   |   |   |   |   | ● |   | 6 |
| 9  | 小豆用櫃      |     | ●  |    |   |   |   |   |   |   |   |   | ● | ●  | ● |   |   |   |   |   |   | ● |   | 5 |
| 10 | 食器食物保管用戸棚 |     |    |    |   |   |   |   | ● | ● |   |   | ● | ●  | ● |   |   |   | ● |   |   |   |   | 6 |
| 11 | 食器保管用櫃    | ●   |    | ●  | ● |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3 |
| 12 | 書類戸棚      |     | ●  |    |   |   |   |   | ● |   |   |   |   | ●  |   |   |   |   | ● |   |   |   |   | 4 |
| 13 | 書類だんす     |     |    |    |   |   | ● |   | ● |   |   |   |   | ●  |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3 |
| 14 | 文箱        |     |    |    |   | ● |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   | ● | ● |   |   |   | ● | 4 |
| 15 | 文箱        |     |    | ●  |   |   |   |   |   |   | ● |   | ● | ●  | ● |   |   |   |   |   |   |   |   | 5 |
| 16 | 本箱        |     |    | ●  |   |   |   | ● | ● |   | ● | ● | ● | ●  | ● |   |   |   |   |   |   |   |   | 8 |
| 17 | 書類函       | ●   | △  | ●  | ● |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 3 |
| 18 | 書類函       | ●   | ●  |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2 |
| 19 | 書類棚       |     |    |    |   |   | ● |   | ● |   |   |   | ● | ●  | ● |   |   |   |   |   | ● |   |   | 6 |
| 20 | 本棚        |     |    |    |   |   |   | ● |   | ● |   |   | ● | ●  | ● | ● |   |   |   |   |   |   |   | 6 |
| 21 | 貴重品入れ     |     |    |    | ● |   |   | ● |   | ● |   |   | ● |    |   |   |   |   | ● |   |   |   |   | 5 |
| 22 | 衣裳だんす     |     |    |    |   |   |   | ● |   | ● |   |   | ● |    |   |   |   |   |   |   | ● |   |   | 4 |
| 23 | チョクトリ入れ用函 |     | ●  |    | ● |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2 |
| 24 | 装身具入れ用函   |     | ●  |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |
| 25 | 装身具入れ用函   |     | ●  |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |
| 26 | 糸櫃        |     | ●  |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |
| 27 | 裁縫箱       |     | ●  |    |   |   |   |   |   |   |   | ● |   |    |   |   |   |   |   |   | ● |   |   | 3 |
| 28 | 箱鏡        |     | ●  |    | ● |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |   | ● |   |   | 3 |
| 29 | 薬だんす      |     | ●  |    |   | ● |   |   | ● |   |   | ● |   |    |   |   |   |   |   | ● |   |   | ● | 6 |
| 30 | 薬だんす      | ●   | ●  |    |   |   | ● |   | ● |   | ● |   | ● | ●  |   | ● |   |   |   |   |   |   |   | 8 |
| 合計 |           | 11  | 12 | 11 | 8 | 2 | 3 | 3 | 9 | 1 | 6 | 2 | 6 | 13 | 7 | 5 | 3 | 6 | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 |   |

△は数に含まない

表 2 凡例

- |  |   |
|--|---|
| a : あり組みつき (てんびんざし)                    | l : 肩付き通し平ほぞつき (かぶせ面肩付き通し平ほぞつき, かぶせ面肩付き 2 枚通し平ほぞつき) |
| b : 竹くぎ打付けつき                           | m : 追入れつき   |
| c : 鉄くぎ打付けつき (鉄打ち)                     | n : こかしばめ (胴付きこかしばめ)                                |
| d : L字形金具留め                            | o : くさび締めほぞつき                                       |
| e : 留め形本ざね端ばめ                          | p : 散らしほぞ組みつき (散らし小ほぞ組みつき)                          |
| f : 留め形ほぞつき (留め形 3 枚ほぞつき, 留め形かくし平ほぞつき) | q : 留めつき (大留めつき, 留め形かくしほぞつき)                        |
| g : 留め形通し平ほぞつき                         | r : T字形金具留め   |
| h : 剣留めほぞつき                            | s : 三方留めつき  |
| i : 剣留め通し平ほぞつき                         | t : 井桁組みつき  |
| j : 組みつき (3 枚組みつき, 上端留め形 3 枚組みつき)      | u : あり形かけつき   |
| k : 肩付き平ほぞつき                           | v : 相欠ぎ組みつき   |

平はぎ, 相欠ぎはぎ, 木口取り履いざねはぎなどの「はぎ」は略す。

表 2 収納家具に用いられる接合法

大まかに分けて22種類の接合法に分けられるが、それを a-v とした。

a の「あり組みつき」は「てんびんざし」や「39枚あり組みつき」のように密度の高い「あり組みつき」から、粗い「あり組みつき」までを含む。組手の精粗はここでは問題にできなかった。

c の「鉄くぎ打付けつき」は頭の大きな鋸や、座金付の鋸、頭が四角形の古いくぎも、量産される現代のくぎも含むこととした。

d の「L字形金具留め」は、帯状のものであれ、線状のものであれ、L字形となり、接合個所を補強しているものである。

f の「留め形ほぞつき」は、正確には「留め形隠し3枚つき」や「留め形隠し5枚つき」「留め形かくし平ほぞつき」その他、さまざまな手法が考えられるが、外側からはその確認が難しいため、この語を用いた。

j の「組みつき」は「3枚組みつき」や「上端留め形3枚組みつき」などを一括した。

l の「肩付き通し平ほぞつき」は「かぶせ面肩付き通し平ほぞつき」や「2枚通し平ほぞつき」を一括した。

n の「こかしばめ」には、いわゆる「さしばめ」を胴付きの「こかしばめ」に含めた。

p の「散らしほぞ組みつき」は「散らし小ほぞ組みつき」や、「通し小根小ほぞ組みつき」を含めたものとして用いた。

q の「留めつき」は板材どうしの「大留めつき」や「留め形かくしほぞつき」や「剣留めつき」などを含む。

薄い板どうしの接合には「平はぎ」「相欠ぎはぎ」「木口取り扉いざねはぎ」などが見られたが、これについては省略した。

なお接合法を大まかに22種類に分類したが、実際にはもっと多様な接合法があると見ておかなければならない。

まずパンダジや銭箱、食器保管用櫃、書類函のようにぶあつい板材で構成されるものは「あり組みつき」がすべて使われている。これを「竹くぎ打付けつき」もしくは「鉄くぎ打付けつき」で補強しているものもあり、また「あり組みつき」で接合された部材の他の、例えば天板底板などの部材は「鉄くぎ打付けつき」で接合し、さらに「L字形金具留め」で補強しているケースも多い。

米櫃、小豆用櫃の「上端留め形井桁組みつき」は造語であるが、この表の中では「井桁組みつき」に入れている（付図4参照）。

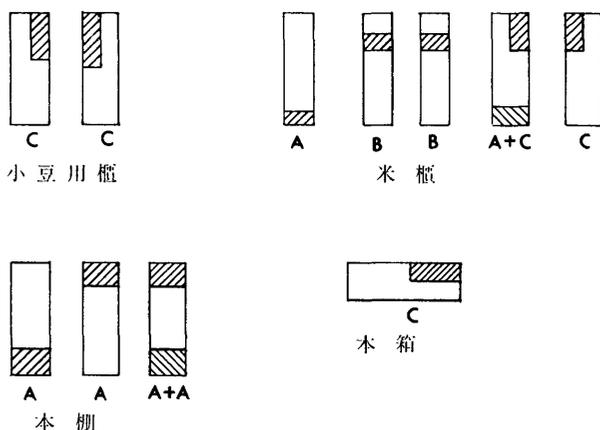


図1 くさび締めほぞつぎの種類

また米櫃，小豆用櫃にも見られ，本箱，本棚に見られる「くさび締め」は，その方法が図1に見るように単一のものではない。特にほぞの木端方向に押し広げるためだけでなく，小豆用櫃，本箱，米櫃にはC型のくさびがある。これはほぞの両辺に対してのくさびと見ることができよう。

大型の収納家具の多くは，構造材と板材で構成されるが，この構造材に細い溝をつくって，そこに板材をはめこむ，「追入れつぎ」が13点に見られる。その中の約半数7点に「こかしばめ」が見られる。そしてこの場合，さしこむ板の“こかし”つまり溝にはめこむ部分を入りやすくするため斜めにあらかじめ削っている部分の傾斜が強いことが特徴的である。13点の「追入れつぎ」の「こかしばめ」ではないものも厳密にいうと多少は，構造材の溝に入れやすくするため，いくぶんかは“こかし”しているはずである。ところが「こかしばめ」になっているものは，くっきりと傾斜角があり，これは，溝の幅と板厚に大きな差があるためである。「こかしばめ」は家具の背面や，天板，棚板の裏面に見られ，通常，家具を置いて使う際には見えない部分に採用されている手法である。

構造材と板材からなる家具の構造材どうしは「留め形ほぞつぎ」または「剣留めほぞつぎ」で接合されているものが多い。これは，フレーム材の表面が半丸面をはじめ，平面ではない面の形状によることなのだろうか。面取りしたフレームが連続した線となって見えるためには，「留め」や「剣留め」の接合方法がとられなければならない。

この他，「竹くぎ打付けつぎ」が多用されていることも特徴の一つである。10～13点にこの接合が認められる。竹くぎの頭の部分が4mm角ほどのものは，その面の様子から竹くぎだとわかるが，頭の小さなもの，あるいは塗膜で材質が不明のものも

あるので全部が竹くぎだとはいえず、木くぎの使用も考えられる。ただ、引出しがあるものについては引出しの底板は、そのほとんどが竹くぎで下から打ち付けとなっていることから竹くぎが大部分を占めていると思われる。

また、接着については、ニカワが併用されたり、また半透明な接着剤のあとも散見された。

板の使い方については、引出しの底板の問題に触れておかななくてはならない。

引出しの底板は、引出しの出し入れの方向に木目を一致させて使うのがわれわれの常識であるが、こうした考え方は韓国の家具には適用されない。引出しの出し入れの方向、つまり前板と向板に、底板の木口がくるものもあるが、そうではなく引出しをスライドさせる方向と直角方向に木目が走るように打ち付けられているものも散見された。このように引出しの動きと木目を一致させることが必ずしも合理的だとは考えられていないことも特筆される。済州パンダジの例でも側板のはぎ合せで、これと似た考え方のものがあつた。

### 3. 使用樹種

家具に使用される木材は多種多様である。代表的な使用樹種としてマツ、モミ、チョウセンゴヨウマツ、イブキ、クリ、ナシ、クルミ、ナツメ、カキ、カラスガキ、マズグルミ、サクラ、カエデ、シラカバ、モクセイ、ケヤキ、ハリギリ、クワ、カヤ、ミズナラ、キリ、コンズイ、チャンチン、竹、ヤナギ、イチョウが挙げられている[崔 1974: 4]。

また①자작나무 (chajangnamu) 白樺, ②참죽나무 (chamjungnamu) 番椿, ③느티나무 (nūt'inamu) 槐木, ④단풍나무 (tanp'ungnamu) 丹楓, ⑤배나무 (paenam) 山梨, ⑥대추나무 (taech'unamu) 棗, ⑦오동나무 (odongnamu) 梧桐, ⑧삼목 (sammok) 杉松, ⑨버드나무 (pōdūnamu) 楊柳, ⑩은행나무 (ūnhaenam) 杏子木, ⑪감나무 (kamunamu) 柿, ⑫밤나무 (pamnamu) 栗, ⑬호도나무 (hodonamu) 胡桃などをその代表的な樹種として示している[裴 1983: 65]。

この13種の使用樹種について少し検討してみたい。

①자작나무 (白樺) は、平南でチャチャクナムといい、平北ではチャということから、和名マンシウシラカンバ=*Betula mandshurica* NAKAI に相当する。しかし同科にチョウセンミネバリ=*Betula costata* TRAUTV や、京畿、平北、全南でオリナムと呼ばれる和名ハンノキ=*Alnus japonica* S et Z などは家具用材として使用されており、これらを総称して白樺と考えることができるのではないだろうか。

②참죽나무 (番椿) はチャンチンの木と訳され [天理大学朝鮮学科研究室 1980: 650], また a kind of red oak ともある [CHANG 1967: 1573]。しかし、これはセンダン科の *Cedrela sinensis* JUSS であり、ツバキでもカシでもない [山林 1938: 380]。和名ツバキ = *Camellia japonica* LINNAEUS var. *spontanea* NAKAI は、トンビャクナム、トンバクナム、トンペクナムであり、チャンチンではない。「和名オノオレカンバは別名ちゃんちん」 [池田 1983: 21] という説明もあるが、和名オノオレは *Betula Schumiditii* REGAL でカンバ属であり、チャンチンではない。

③느티나무 (槐木) とあるのは、漢字をそのまま読めば和名のエンジュだが、エンジュは 꾀목 (koemok) または 회화나무 (hoehwanamu) であり、느티나무 はニレ科の樹種をさしている。

ニレ科の樹種としては和名チョウセンニレ、朝鮮名ヌルップ = *Ulmus macrocarpa* HANCE, 和名ケヤキ、朝鮮名テウルミナム、ヌテナム、キューモック、カイモック、ヒューホァナム = *Zelkova serrata* MAKINO であり、ヌテナムという呼び方が느티나무 と符号する。『朝鮮森林植物篇』では「朝鮮産ニレ科植物の効用」として「材用としてはケヤキに及ぶものなし。現時黄海道を第一とす。以前は済州島、鬱陵島の原始林にも多かりしが今は材らしきものを出す木さえなし。——中略——朝鮮産のものは材質において材木商の所謂ツキケヤキ(槻)に当る。」としている [中井 1976f: 12-19]。特にニレ科の樹種は塗装をすれば判別しがたいこともあり、いわゆるニレもケヤキも同じ材種とみなされたであろう。また材質はケヤキより劣り、木も大きくはないが和名ハリゲヤキ、朝鮮名シムナム、クジナム、シェクナム = *Hemiptelea Davidii* PLANCHON も使用されてきた可能性はあるだろう。

④단풍나무 (丹楓) に対応するのは済州道でペルゴンナム、平北でサンキョプナム、全南でシンナムと呼ばれ、京畿、全南でタンブンナムと呼ばれることから、和名チョウセンハウチハ = *Acer Pseudo-Sieboldianum* KOMAROV と考えられるが、これは灌木または小高木で分岐が多く良材は得難い [中井 1976a: 1-13]。和名チョウセンヤマモミジ = *Acer palmatum* THUNB, v. *coreanum*, NAKAI は全南でシンナムだが、高木であり、また和名イタヤカエデ = *Acer pictum* THUNB var. *mono*, MAXIM は平南でコロソイナム、全南ではシンナムと呼ばれるが、材質としてはカエデと理解されたであろうし、材質がやや劣る和名マンシウリハダ = *Acer tegmentosum* MAXIM も比較的高木であることから、家具用材として使用された可能性は高い。和名で対応させるとすればチョウセンヤマモミジ、イタヤカエデ、マンシウリハダの3種の樹種が考えられる。

⑤ 叫나루 (山梨) は、直接和名にすればヤマナシ=*Pyrus montana* NAKAI だが、これは小高木 [中井 1976b: 6-20] であり主要な材とは考え難い。

和名チョウセンヤマナシ=*Pyrus ussuriensis* MAXIM は京畿、平安ではトルペイ、その他の呼び方としてトルペイナムがある。また和名シベリアリンゴ=*Malus baccata*: var. *Sibirica*, SCHNEID は平北でヤハカンナムであり、江原ではトルペイナムと呼ぶ。また、これと同属のエゾノコリンゴは高さ 30 m に達する高木であり、これも家具用材として使用された可能性は高く、これらを総称したものと考えられる。

⑥ 대추나루 (棗) については、「ナツメの老木ならびにケンボナシは小道具を作るに用いられ、煙草入れ、盆、手箱等にすれば木理美し」 [中井 1976c: 9] とあり、これらの樹木を指すものと考えられる。

和名ナツメ=*Zizyphus sativa* GAERTNER var. *inermis* SCHNEIDER は済州島でテチュー一、平南、江原、京畿、咸南でタイジュナムと呼ばれ、漢字をあてれば大棗木である。

和名ケンボナシ=*Hovenia dulcis* THUNBERG var. *glabra* MAKINO は江原、京畿、忠南、全南ならびに鬱陵島に産し、ポリケナムと呼ばれるが、前述のように、ナツメとして用いられたと考えられる。

⑦ 오동나루 (梧桐) = *Paulownia tomentosa* STEUDEL はオートナムまたはムクイナモと呼ばれ、重要な家具用材である。

⑧ 삼수 (杉松) は松柏類の総称である。北部にはエゾマツ、トドマツ、チョウセンカラマツ、トウシラベ、中部にはチョウセンモミ、チョウセンゴヨウ=*Pinus Koraiensis* SIEBOLD & ZUCARINI, アカマツなどが分布しており [金 1978: 31; 野村 1981: 23], これらの総称である。

これらの針葉樹は、家具の重要な樹種である。

⑨ 버드나루 (楊柳) に対応する和名はコウライシダレヤナギ=*Salix pseudo-lasiogyne* LÉVEILLÉ であるが、これとともに材として用いられるものは、和名ケショウヤナギ、一名カラフトヤナギ=*Chosenia bracteosa* NAKAI またはエゾヤナギ、朝鮮名カイポートル=*Salix rorida* LACKSCHEWITZ, 南部のアカメヤナギも使われる [中井 1976c: 18-46]。

⑩ 은행나루 (杏子木) はイチョウ=*Ginkgo biloba* LINNÉ である。

⑪ 감나루 (柿) は和名カキノキ=*Diospyros Kaki* LINNÉ, FILIUS で、この他マメガキ、シナノガキ、サルガキなどは、慶尚、京畿、全羅でコヨンナムで一括され、これらの総称と考えられる。

⑫ 밤나루 (栗) は和名チョウセングリ=*Castanea Bungeana* BL がパンナム、クルグ

ンバンナム、ヤンジュバンナムなどと呼ばれ、これらの総称である。クリはニレ、ケヤキなどの代用とされることがある [中井 1976a: 3-11]。

⑬호도나무 (胡桃) は和名マンシウグルミ = *Juglans mandshurica* MAXIMOWICZ が平北でカライナムと呼ばれ、かつて銃床に使われたものがこれである。また和名テウチグルミ = *Juglans sinensis* DODE は朝鮮名ホトナムとあるので、他のクルミも含めた呼び方であると解される [中井 1976f: 20-94]。

この他、モクセイ科 = Oleaceae の和名ヤチダモ = *Fraxinus mandshurica* RUPRECHT は、咸南、咸北、江原でトゥルマイナム、平北でトゥルミェイナム、全南でムルプリナムと呼ばれ、これは「建築用、家具製作、木鉢製作等に用ふ。チョウセントネリコはその代用とし得るも大木少し」 [中井 1976c: 10-14] とあり、ヤチダモも重要な樹種だったことがわかる。

また、オウトウ科の和名ウラボシザクラ = *Prunus Maackii* RUPRECHT. 平北でいうキャボディをはじめとするサクラのたぐいも使用された。

ウコギ科の和名ハリギリ、一名センノキ = *Kalopanax pictum* NAKAI はオムナム、オップナム、ボンナムと呼ばれ、材用としては、これをセンノキと称し、家具を作るに多く用いられる [中井 1976d: 16] ものである。

この他、ドロノキ、シナノキ、ホルトノキも使われた可能性もあるだろうし、ケグワは日本の筑前びわにも多く使われたものである。

使用樹種の呼び方は、わが国においても、木材の肌の色、木理の状態と同じ呼び方になったり、地方によってその呼び方が異なる場合があるのと似て、かなり多様な実態であることがわかる。

さて、30点の家具に使用されている樹種は表3の通りである。目視（10倍拡大および30倍拡大）での識別であり、また、標本は塗装された部分がほとんどで、細かく確定できないものは、針葉樹、あるいは広葉樹環孔材、ないし散孔材と記すにとどめた<sup>26)</sup>。

単一の樹種でできているものは、1. タンス：二葉のマツ、3. パンダジ：ニレ、7. 銭箱：ニレ、9. 小豆用櫃：マツ、11. 食器保管用櫃：二葉のマツ、15. 文箱：二葉のマツ、26. 糸櫃：マツ、27. 裁縫箱：針葉樹の8点で、他は2～4種の木材が併用されている。30. 蓼だんすは二葉のマツと針葉樹、晩材部の道管が散在する、たとえば、ヤチダモ、

26) 広葉樹散孔材の場合、特に30倍の拡大程度で判別するのは、実のところ大変困難で、また顕微鏡による観察でも判別できない場合があるという林昭三博士のお話である。従って、著しい特徴が認められる他は、軽々に樹種は同定できない。特に塗装された上から目視のみによる判別は針葉樹と広葉樹すら見誤るおそれがある。

| 使用樹種 |           |        | 針葉樹 |    |        |        | 広葉樹 |     |    |    |     |     |     |    |   |
|------|-----------|--------|-----|----|--------|--------|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|----|---|
|      | 標本名       | 使用地    | 針葉樹 | マツ | マツ(二葉) | マツ(五葉) | 環孔材 |     |    |    | 散孔材 |     |     |    |   |
|      |           |        |     |    |        |        | 環孔材 | ケヤキ | ニレ | クリ | キリ  | 散孔材 | カエデ | カキ |   |
| 1    | タンス       | 大韓民国   |     |    | ●      |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 2    | 貴重品入れ     | 京畿道    |     |    | ●      |        |     | ●   |    |    |     | ●   | ●   |    |   |
| 3    | パンダジ      | 濟州島    |     |    |        |        |     |     | ●  |    |     |     |     |    |   |
| 4    | タンス       | 大韓民国   |     |    | ●      |        |     |     |    | ●  |     |     |     |    |   |
| 5    | 銭箱        | 慶尚道    |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     | ●   |     |    |   |
| 6    | 銭箱        | 京畿道    |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     |     | ●   |    |   |
| 7    | 銭箱        | 大韓民国   |     |    |        |        |     |     | ●  |    |     |     |     |    |   |
| 8    | 米櫃        | 大韓民国   |     | ●  |        |        |     |     | ●  |    |     |     |     |    |   |
| 9    | 小豆用櫃      | 大韓民国一帯 |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 10   | 食器食物保管用戸棚 | 大韓民国一帯 |     | ●  |        |        |     |     | ●  |    |     |     |     |    |   |
| 11   | 食器保管用櫃    | 大韓民国一帯 |     |    | ●      |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 12   | 書類戸棚      | 忠清南道   |     |    |        |        |     |     | ●  |    |     |     | ●   |    |   |
| 13   | 書類だんす     | 京畿道    | ●   |    |        |        |     |     | ●  |    |     |     | ●   | ●  |   |
| 14   | 文箱        | 大韓民国   |     |    | ●      | ●      |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 15   | 文箱        | 大韓民国   |     |    | ●      |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 16   | 本箱        | 京畿道    |     | ●  |        |        |     |     | ●  |    |     |     | ●   |    |   |
| 17   | 書類函       | 慶尚南道   |     | ●  |        |        |     |     |    | ●  |     |     |     |    |   |
| 18   | 書類函       | 慶尚南道   |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     |     | ●   |    |   |
| 19   | 書類棚       | 京畿道    |     |    |        |        |     |     |    |    |     |     | ●   | ●  |   |
| 20   | 本棚        | 京畿道    |     |    | ●      | ●      |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 21   | 貴重品入れ     | 大韓民国   |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     |     | ●   | ●  |   |
| 22   | 衣裳だんす     | 忠清南道   |     |    |        |        |     |     |    |    |     |     | ●   | ●  |   |
| 23   | チョクトリ入れ用函 | 大韓民国一帯 |     |    |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 24   | 装身具入れ用函   | 大韓民国一帯 |     |    |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 25   | 装身具入れ用函   | 大韓民国一帯 |     |    |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 26   | 糸櫃        | 大韓民国   |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 27   | 裁縫箱       | 大韓民国   | ●   |    |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    |   |
| 28   | 箱鏡        | 慶尚南道   |     | ●  |        |        |     |     |    |    |     |     |     |    | ● |
| 29   | 薬だんす      | 京畿道    |     |    |        |        |     |     | ●  |    |     |     | ●   | ●  |   |
| 30   | 薬だんす      | 大韓民国   | ●   |    | ●      |        |     |     | ●  |    |     |     | ●   |    |   |
| 計    |           |        | 3   | 11 | 8      | 2      | 5   | 3   | 2  | 2  | 10  | 7   | 1   | 1  |   |

表3 収納家具に用いられた樹種

チャンチン、チョウセントネリコ、センダンなどの広葉樹環孔材、そしてキリの4種が使われている。

全体として見ると針葉樹材を使用しているものが27点中21点で、針葉樹、なかでも五葉のマツ、二葉のマツを含めたマツ材が多く使われており、収納家具の使用樹種として重要な役割りを果たしていることがわかる。

また、広葉樹材としては、キリが10点で最も多く、マツ材と共に韓国の収納家具の二大樹種だと言える。これらは、表面材に使われることもあるが、主として引出しの前から見えない部分や、本体の側板、背板、棚板として使われるものである。

キリを除く環孔材として樹種が同定できたものは2貴重品入れのケヤキ、3パンダジのニレ、4タンスのクリ、7銭箱のニレ、8米櫃のケヤキ、10食器食物保管用戸棚のケヤキ、17書類函のクリであり、12書類戸棚、13書類だんす、16本箱、29薬だんす、30薬だんすについては同定できなかった。12はハリギリか、13はトネリコ属までは同定できる。16は孔圏外道管散在の特徴あり、29はニレ科である、30については前述のとおりである。

散孔材については2貴重品入れの天板がカエデであること、28箱鏡がカキであることは同定できたが、2貴重品入れの側板、6銭箱、13書類だんす、19書類棚、21貴重品入れ、22衣裳だんす、29薬だんすに使用されている散孔材は同定できなかった。ただ6は放射組織の大小があり、カエデ属である。29はナシの可能性が高い。

#### 4. 塗装・仕上げ

塗装は、漆塗りと油塗装に大別できる。「漆は塾漆と生漆に区別されるが、生漆がより勝る」[裯 1983: 75]とされるが、この塾漆について、「我国の瀬湿（せしめ）掻取法に等しく、4、5年生の幼樹を伐採し、これを水に一週間浸漬し、或はそのまま火に炙りて採漆するこの漆を普通火漆と称する」[沢口 1966: 138]とあることから、塾漆＝火漆と考えられる。日本では火漆は、下地漆として使用されてきたものである。

生漆は、耐水性を与えるため、盤、木鉢に使用された他、櫛、籠、盆、硯床などにも使用されたが、朱漆は宮中用で、民家では昔は使われなかった。黒漆は、螺鈿その他に用いられ、チョウセンカクレミノ = *Textoria morbifera* NAKAI<sup>27)</sup> から採取される

27) 「チョウセンカクレミノは全南の南部及び珍島、莞島、甬島、甬吉島等の諸島、並びに済州島にありて大木となる。その皮を傷つけ置けば乳管より黄色の漆を生ず。住民はこれをあつめて水中に蓄える。必要に応じて水中より取り出し、箱、箆筒等を塗る。朝鮮の家具店に見る鮮黄色の器はこの漆にて塗りたるものなり」[中井 1976g: 16]。

黄漆は紙器に塗られていた。

いまひとつの塗装は、油塗装である。現在わが国においても一般的に oil finish は行われているが、それと同じような方法であるのだろうか。襲によれば荏油、豆油、胡桃油や、中国産桐油を使う塗装が採られていた [褒 1983: 74] という。ふつう、こうした油の塗装について、わが国の木材塗装の関係者に問えば、「それはボイル油製品だろう」という答えが帰ってくる。つまり、これらは乾性油の原料であり、乾性油はその乾燥性を改善して「ボイル油」とし、これに顔料を加えたものが、油性ペイント、つまりペンキである。すなわち、これらの油はペンキの原料として用いられてきているものである。

荏油 (Perilla Oil) は荏胡麻から採取される油で、中国が主産地で「蘇子油」とも称せられる。乾燥性が強く、光沢、耐水性、耐候性のすぐれた塗膜を生ずる。板紋り、その他の方法で採油し、また種子を炒り、臼で砕き、後、更に蒸気で蒸し楔形の圧搾器で製油されることが古くから行われている [坂田 1951: 7; 兒玉 1953: 46]。

豆油は大豆から採油されるもので、乾性油や塗膜の性状はかなり劣り、単独では塗料にし得ないが、主として他の乾性油と混合して用いる。ひまわり油と共に現在も油絵具の原料として用いられている。

中国産桐油は、中国南部特産のアブラギリの種子から採油される油で、乾燥性は荏油よりも強く、塗膜は耐水性がよく、また比較的アルカリにも耐える。油性ワニスの原料としてよく用いられ、灯火用、油紙にもかかつて用いられたものである。

胡桃油は、タンニンが多く工業的な乾性油としてはあまり用いられないが、古くは日本でも漁網を染めるものとして用いられ、器具のつや出しにも使用されるものである。

これらの油塗装の特徴は、いわゆる「使いこむことによって味が出る」ものであるといわれる。しかし、採油した後、加工をすることによって塗膜を生ずるようになるボイル油の状態のものでは、油を含浸させることにならないので、もし、“味が出る”ものだとすれば、ボイル油以前の状態の油が使われたと見なければなるまい。

キリの板材は、本箱や書類戸棚などに見るようにかなり木理がくっきりと浮かび上がっている。これは烙法(인두질)と呼ばれる技法で、キリの板面を熱したコテで焼き、ブラシで木理を出していくやり方で、わが国では、琴の製作などに用いる方法と同様である。

## 5. 装飾文様

貴重品入れの透かし彫りや、紙張りの衣裳だんすの扉に描かれた強烈な色彩の絵、そして板面に彫刻された文様、金具にあらわされた装飾文様は、家具と一体でありながらも、それ自体としても韓国の造形の特徴を知り得る手がかりになりそうである。

衣裳だんすに、小さく描かれている木々が何であるのかかわからないが、他の9つの要素は明らかである。赤々と照る太陽と、たなびく雲、荒々しくそりたつ奇岩、空に舞う双鶴、岩肌からしぶきをあげつつ流れ落ち、波となり泡となり、たゆたう流れと姿を変える水、その波上に遊ぶ双亀、豊かに緑を茂らせる老松、静かに遊ぶ、羽衣伝説にもでてくる山神霊の使者である鹿<sup>28)</sup>、そして日本や中国では靈芝という不老長生の靈薬だとされる不老草が描かれている。こうした絵は「十長生」とよばれている<sup>29)</sup>。

十長生は、すべて網羅して表現されることより、家具類においては、その二、三の要素がとりだされることの方が多い。

例21（付図8）の貴重品入れのつり上げ扉には透かし彫りがある。茂る松とその枝をぬうようにわきでる瑞雲、松の下に伸びる不老草、そして二頭の鹿と石が透かし彫りにされ、また例4（付図2）のタンスの両開き扉にも、勢いのよさそうな波上の亀が線刻されている。いずれも長生不死の象徴であり、吉祥の象徴である。

装飾金具は家具の重要な構成要素であり、時として、木肌と競うかのような迫力を持つものである。

金具には、双喜文（付図2）があり、卍字文の透刻（付図1, 4）が多く用いられ

28) 金剛山を舞台とする羽衣伝説で、独り者のきこりと天女が結ばれる物語に出てくる山神霊（仙人）の使者は鹿である【申 1981: 15】。

29) 「高麗時代の文人、李穡（1328～1396、号、牧隱）の牧隱詩藁に歳画十長生の詩があり、日、雲、水、石、松、竹、芝、亀、鶴、鹿を歌っている。ところが、朝鮮総督府の朝鮮語辞典や、北川左人著の朝鮮固有色辞典などには、日、山、水、石、雲、松、不老草、亀、鶴、鹿とあり、さらに売られている色刷の十長生には、日、雲、山、水、不老草、松、竹、鶴、亀、鹿を描いているものが多いし、他に硯や箸ぶくろにもこれと同様のモチーフが描かれていた。

従って十長生といっても恒常的なものは、日、水、松、鶴、亀、鹿、不老草（芝、靈芝）の7つであり、山、雲、月、石、竹は流動的である」とし、「朝鮮の十長生は、その要素が中国の神仙思想に由来するとはいえ、その構成もまた中国から伝わったということではできないのであって、それはいわば素材を中国の神仙思想に借りて、朝鮮において構想されたものと見ねばなるまい。朝鮮には、かかる思想の素材を受容し発展せしむる適当な信仰的地盤が存在したのであって、朝鮮の地盤の上に中国の神仙思想の再構成を試みたものが十長生であるといってもよい」【秋葉 1954: 126-128】。

この十長生をつけるのは、婚礼の際に新婦が持参する箸ぶくろの刺しゅうか、家族の居室の中でも老人の居室である越房(우방)の壁に限られるものであり、舎廊房、すなわち主人の居室兼客間には張ることはないものである。従って、この衣裳だんすは越房に置かれた可能性もあと見ねばなるまい。

ている。これらも長寿を願い、さいわいを呼ぶ表現である。

蝶番には大きな不老草文や燕尾文、菓葉文、蝶文があり、錠前座金には円文、宝相華文、菓葉文、不老草文がある。

L字形留め金具にはかんざし形、望頭形、花形、蓮峯形、菓葉形のものが見られ、つり下げ状の取手金具は、半月形、弓形、コ字形、こうもり文があり、円形や菊花形の座金を持つ。引出しやけんどん蓋のつまみ型取手には水仙花文の座金が多く、これは天桃形のつまみと一対になることが多い。

菓葉形はシンプルな長方形の角の部分が小さく面取りされたものをいうが、菓葉は小麦粉を練り油で揚げて蜜をつけたもので、これに型をつける木型からとった名称である。

動物文として燕尾文、こうもり文、蝶文が挙げられるが、こうもり文は取手だけでなく、取手受けの座金としても使われている。このこうもり文は「蝙蝠」の蝠が福と同音であることから中国人の最も好むものの一つであるとされる [岡登 1968: 118]。確かに中国のそうした考え方が、そのまま入ってきたことも考えられるが、文字の音が福に同じであることに加えて、こうもりは多産であり、このことから、子孫繁栄の象徴として、豊饒の象徴として造形され、装飾金具として使われてきたのではないかと考えられる。燕尾文についても、巢の中のひなに餌を与える親つばめの姿は、暖かくなると目にするものであり、低く飛ぶ姿、餌を与える後姿は、造形の対象として好適だったといえよう。

宝相華文の錠前座金や蓮峯形の留め金具を見るとき、高麗あるいは、それ以前の造形が感じられる。李朝の排仏政策にもかかわらず、仏教全盛時の造形の残影があるとはいえないだろうか。如意頭文の金具もあり、如意頭文の浮かし彫りも多く見られる。

この如意頭文の彫刻と共に鏡板に施されるのは眼象文である。

植物文様としては、宝相華も入れられようが、形態が、より自然を写し取るタイプとして水仙花、天桃、菊花文が挙げられる。水仙花文は新春の瑞兆花とされ、冬の表象で、水仙の仙が、天仙の仙であるため吉祥の花とされている。また、天桃についても、悪鬼をはらい、長寿を表象するものとして、生命の果実と考えられたものである。

装飾文様、装飾金具を個々にみると、そこには自然、生命、願いという内容を持っていることがわかる。家具の構造や機能に従うべきはずの金具は、単にそれのみに止まらず、イメージの世界をあわせ持つものである。

## Ⅳ. ま と め

民博所蔵の韓国の家具の中から、収納系の家具30点について、その形態、構造、使用樹種、塗装、仕上げ、装飾文様について考察した。

1 形態は、パンダジについては、その幅と奥行きのプロポーションがほぼ2:1であることが特徴として挙げられよう。また、全州櫥、モリチャンと呼ばれる2つについては、幅:高さが1:1で、形態の印象はまったく異なるが、比率としては同じであることが指摘できる。

2 銭箱をはじめ各種の函(ハム)、櫃(クェ)の形態の特徴としては、その側面形で、大きさの大、小はあるが、奥行き:高さが1:1の比率を持っている。

3 米櫃の幅と奥行きの関係では黄金比となっていること、前面から見たところでは錯視をたくみに補正させつつバランスをとる方法がとられていることが興味深い。

4 また食器食物保管戸棚=饌穢(チャンジャン)は、基本的には2:1:3と見たてた形の作り方である。

5 螺鈕の文箱のように幅:奥行き:高さが2:1:3、そして本箱(ソジャン)の胴体部分の幅:奥行き:高さはほぼ整数比の2:1:2というように、整数比のプロポーションを持つものが多いことがわかる。

6 しかし、この整数比で完結せず、これに曲線的な脚部や支輪の出ぐあいでの独特の形態に仕上げている感がある。

7 また書類戸棚=双文匣(サンムンカップ)の水平への延びと、書類棚=四方卓子(サパンチャクジャ)の垂直への伸びは、好対照をなすものである。

8 また構造材には面取りされているものが多く、構造材をやわらかくまた変化を持たせ、あるいは細く見せようとする配慮が働いている。

9 収納家具のもの出し入れの方法には、下ろし扉、つりあげ扉、けんどん蓋、押し上げ蓋には蝶番のあるものないもの、隠し蓋などがあり、引出しを持つものは10点である。ほかに引違い戸もあり多様な開閉機構が用意されていることがわかる。

10 箱形の家具の場合、錠前をかける構造になっているものが大部分である。

11 主要な構造上の特徴については、板材どうしを組みあげたものでは、「あり組みつぎ」が多く竹や鉄くぎで打ちつけられた部材があること、そして小型のものでは竹くぎで板材が接合されているという共通性がある。

12 米櫃=斗厨(トゥイジュ)や小豆用櫃(パットゥイジュ)には独特な「井桁組みつぎ」が共通し、また、その他のものを含めて、「くさび締め」を併用した「通し

ほぞつぎ」があることも特色の一つである。

13 構造材と板材の接合は、「こかしばめ」による「追入れつぎ」が印象的である。

14 使用樹種ではマツ材が最も多く使われ、広葉樹ではキリが多用されている。他の広葉樹材で同定できたものはケヤキ、ニレ、クリ、カエデ、カキの5種である。そして19点が異種の材を用いている。これは見えるところ見えないところよっての材の使い分けと、堅い材でなければならないところと柔らかい材でいいところの使い分けに大別される。

15 仕上げは烙法によるキリの表現と、油塗りが多い。

16 装飾文様は十長生に見るように、天、地、動、植物にわたる。装飾金具にも半月、燕尾、こうもり、蝶、天桃、水仙花、不老草、菊花、蓮峯が多く使われている。これらを見ると、自然に対する感性の鋭さないしは、意識の強さを指摘しない訳にはいかない。

特に、天桃や水仙花の形態はおそらく韓国の造形の特質を示しているのではないか。そして不老草やこうもりの形もまたそうであろう。

一方、双喜文や卍字文のような吉祥文も多用される。

金具の形態に託されるものは、人々の自然に対する思いであり、吉祥を願う人々の切なる気持であった。装飾金具は、純然たる文様ではない。明確な働きを持つ金属部品である。しかし、そこには蝶番としての働き、かすがいとしての働き、錠前さしの座金をこえて意味的世界を構築しているようにみとれる。家具の部品でありながら、家具に精神的意味が付与されているように考えられる。

韓国の収納家具は、全般的にみて繊細で高度な木工技法とラフなそれとが混在しているようにみえる。

また、形態や装飾には民族的な特徴を持つものが多く、精神性の表現として家具は重要な役割を持つものだけということができる。

家具そのものについては以上のことがわかったものの、家具の使われ方の細部については今後の課題として残る。また、どのような工具を使い、どのような手順で製作されたのかということについても、ここではふれなかった。この2つの視点を加えなければ、家具の描写は完結しないと考えている。

## 謝 辞

この報告は（財）私学研修福祉会の補助により実施した国内研修の成果の一部である。研修の機会を与えていただいた関係各位に謝意を表する次第である。

この報告を記すにあたり多くの方々のお厚意を得た。

国立民族学博物館情報管理施設，文献図書係，標本資料係の多くの方にお世話になった。特に標本資料の実測，記録にあたり，宇野文男氏はじめ，皆さんに大変御迷惑をおかけした。

また韓国語に関して，第一研究部助手重松真由美さんに御教示いただいた。

樹種の識別については，京都大学木材研究所の林昭三博士に御指導いただいた。

この報告で取り上げた標本資料は，そのほとんどが放送大学，祖父江孝男教授の御尽力によるものであり，深甚なる敬意を表するとともに御礼申し上げる次第である。

昭和59年10月1日より昭和60年3月31日まで6カ月間，私の指導教官として，終始，御指導，御助言をいただいた国立民族学博物館第五研究部，中村俊亀智教授に深く感謝申しあげる次第である。

なお，管理部，研究部の多くの方々にご厚情を賜わり，ここにお礼を申し上げます。

## 文 献

秋葉 隆

1954 『朝鮮民俗誌』六三書院。

CHANG, Martin Lee

1967 *A Korean English Dictionary*. U.S.A.

崔 淳 雨

1974 『韓国美術全集13 木漆工藝』同和出版公社。

朱 南 哲

1981 『韓国の伝統的住宅』野村孝文訳，九州大学出版会。

池田三四郎

1983 『李朝木工』東峰書房。

梶村秀樹

1977 『朝鮮史——その発展——』講談社。

金 思 燁

1978 『朝鮮の風土と文化』六興出版。

清宮俊雄

1976 「黄金分割」『世界大百科辞典』第4巻 平凡社，p. 163。

兒玉正雄

1953 『塗料と塗装』太陽閣。

国立民俗博物館

1982 『国立民俗博物館』通川文化社。

中井猛之進

1976a 『朝鮮森林植物篇』第1巻 国書刊行会。

1976b 『朝鮮森林植物篇』第2巻 国書刊行会。

1976c 『朝鮮森林植物篇』第3巻 国書刊行会。

1976d 『朝鮮森林植物篇』第5巻 国書刊行会。

1976e 『朝鮮森林植物篇』第6巻 国書刊行会。

1976f 『朝鮮森林植物篇』第7巻 国書刊行会。

1976g 『朝鮮森林植物篇』第8巻 国書刊行会。

中村達太郎

1913 『日本建築辞彙』丸善。

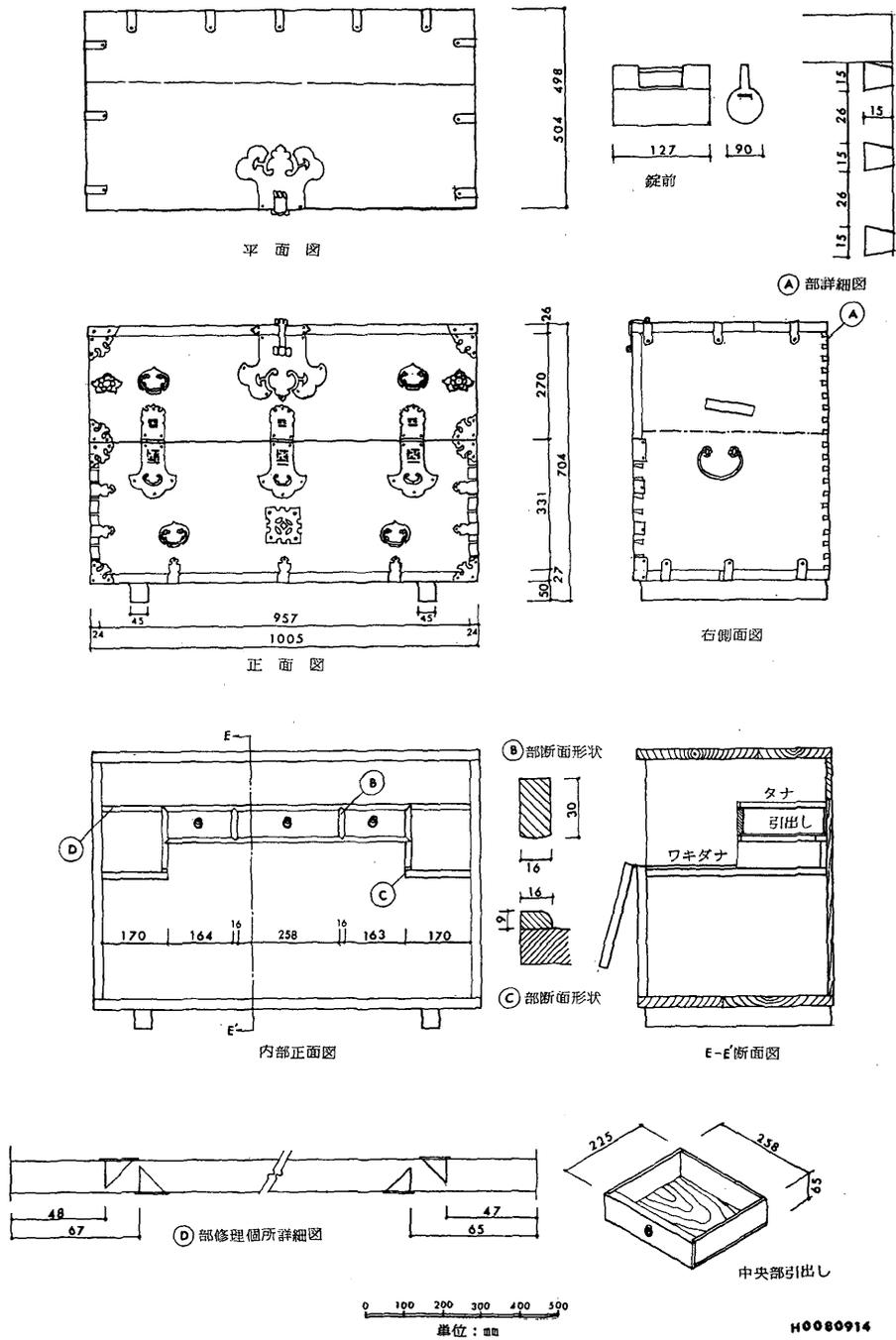
成田寿一郎

1977 『木材工芸用語辞典』理工学社。

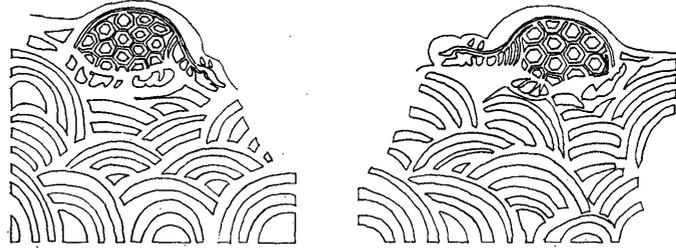
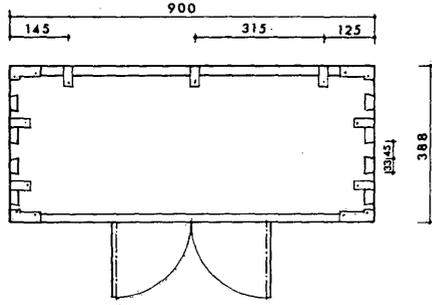
野村孝文

1981 『朝鮮の民家』学芸出版社。

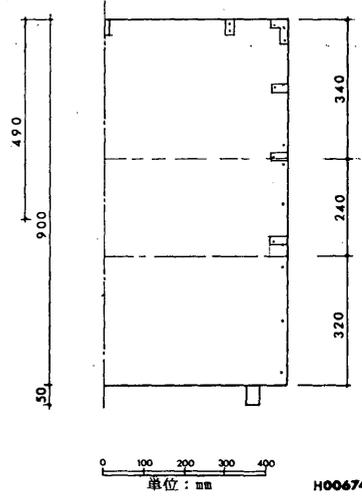
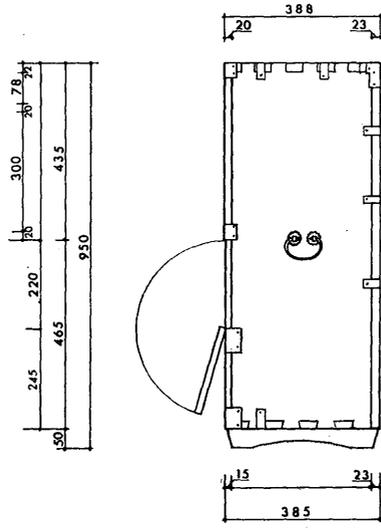
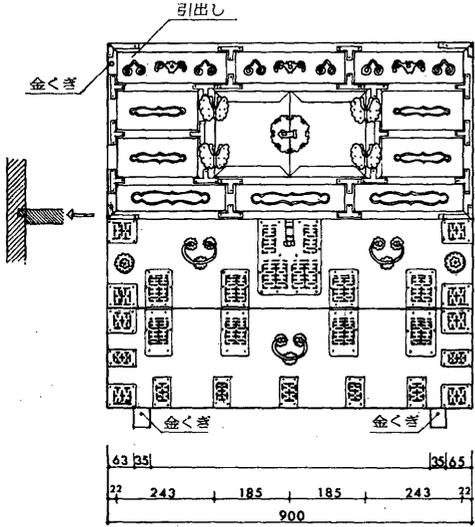
- 岡登貞治（編）  
1968 『文様の事典』東京堂出版。
- 藜 満 實  
1983 『李朝木工家具의美』普成文化社。
- 坂田秀太郎  
1951 『塗装技能一般』産業図書株式会社。
- 沢口悟一  
1966 『日本漆工の研究』美術出版社。
- 申 来 鉉  
1981 『朝鮮の神話と伝説』太平出版社。
- 塩野谷博治  
1980 『古箏筭百選』創樹社美術出版。
- 沈 雨 晟  
1983 「韓国の伝承工芸(2) 螺鈿漆器匠」『工芸学会通信』16(17): 4 工芸学会。  
天理大学朝鮮学科研究室
- 1980 『現代朝鮮語辞典』養徳社。
- 鳥海義之助  
1980 『木工の継手と仕口』理工学社。
- 鄭 台 鉉  
1974a 『韓国植物図鑑』上巻 木本部 理文社。  
1974b 『韓国植物図鑑』下巻 草本部 理文社。
- 山林 暹  
1938 『朝鮮木材の識別』朝鮮総督府林業試験場。
- 渡辺素舟  
1971 『東洋文様史』富山房。
- WICKMAN, Michael  
1980 *Korean Chests: Treasures Of the Yi Dynasty*. Seoul International Tourist Publishing Company.



付図1 タンス 現地名 반닫이 (pandati)

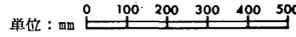
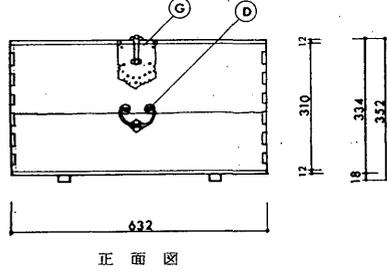
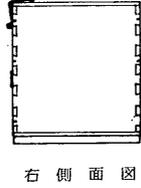
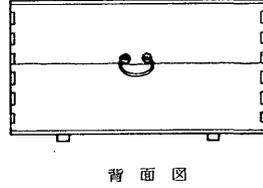
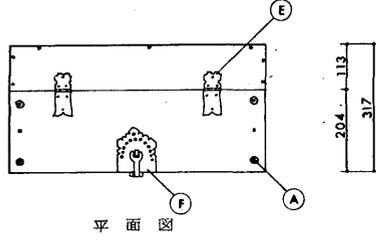
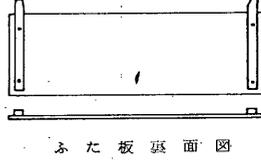
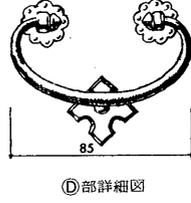
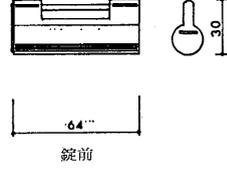
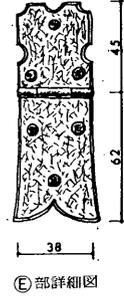
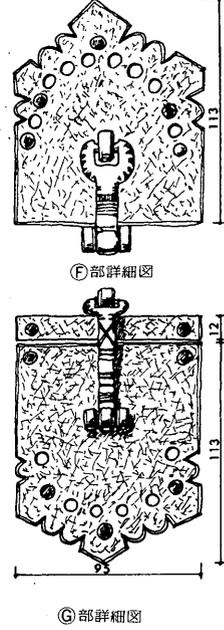


両開き扉にレリーフされた「波上の亀」



H0067444

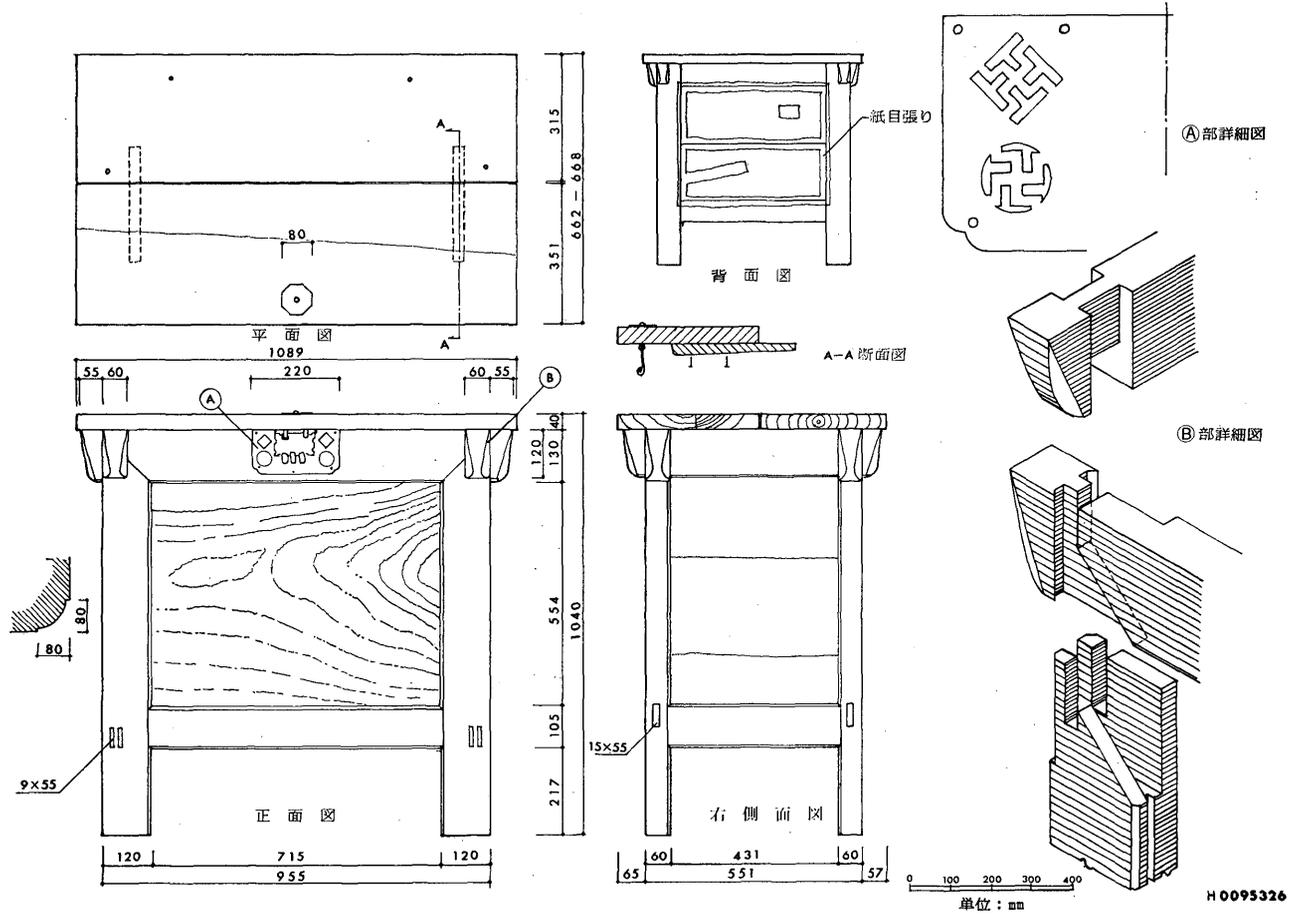
付図2 タン ス 現地名 머리장 (mörichang)



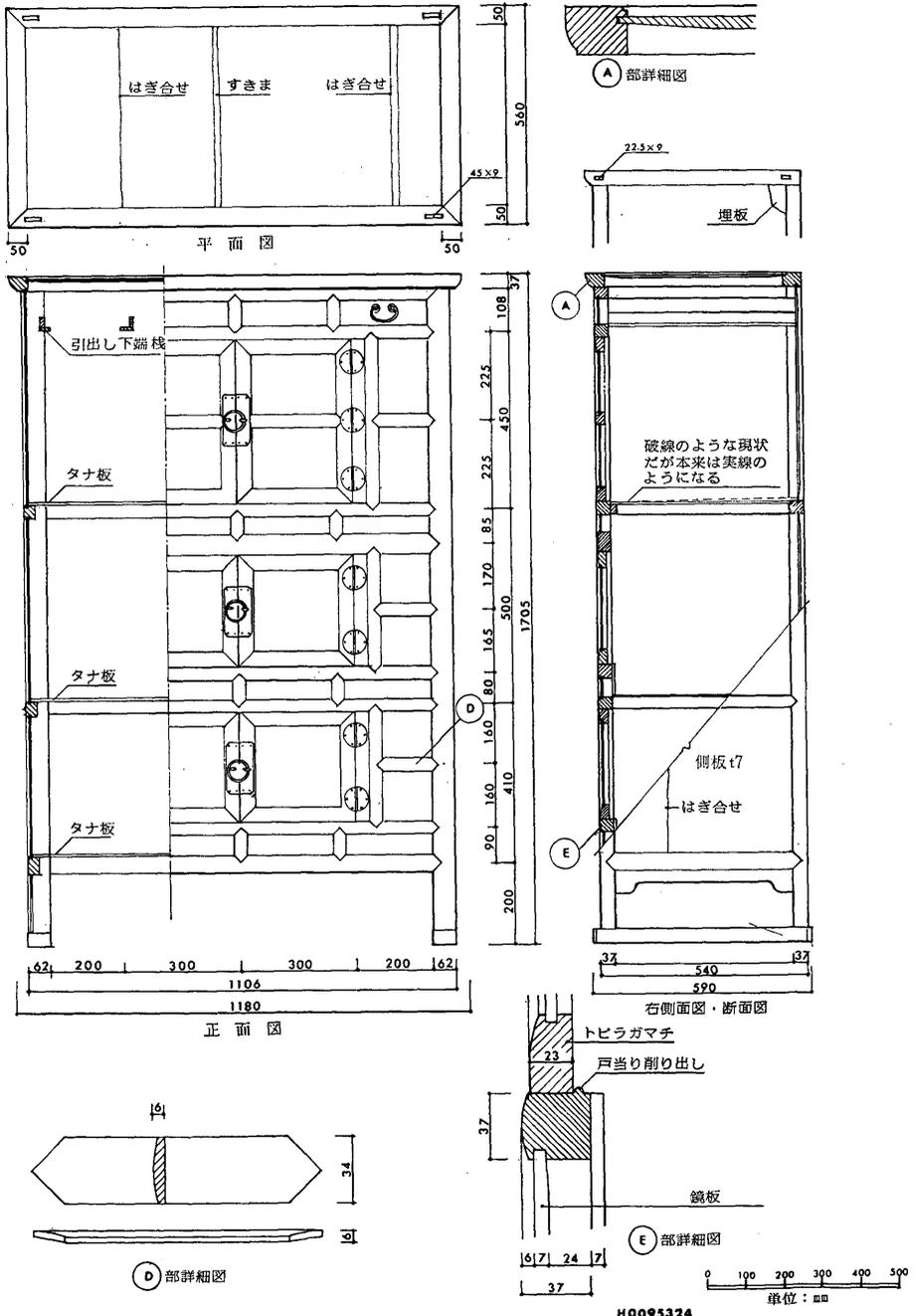
H0084769

付図3 銭箱

現地名 ton'gwe



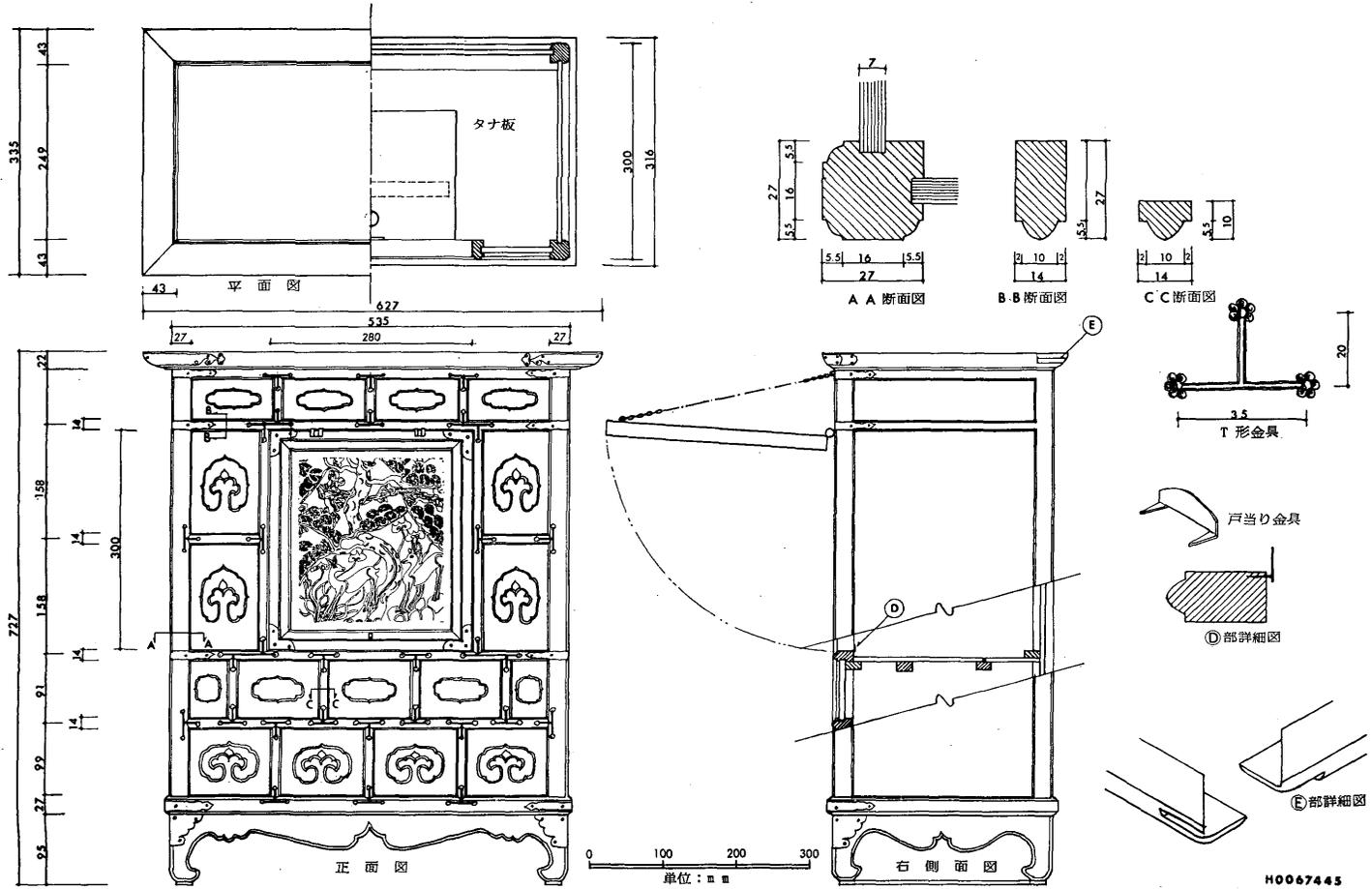
付图4 米 櫃 現地名 뒤주 (twichu)



付図5 食器食物保管用戸棚 現地名 찬장・饌穢 (chanjang)

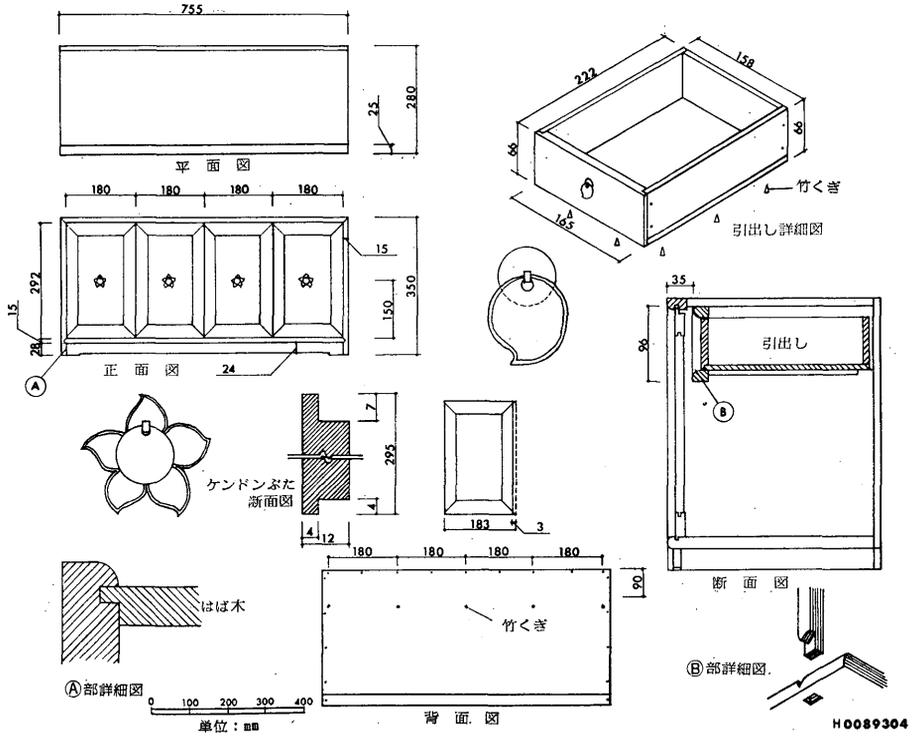




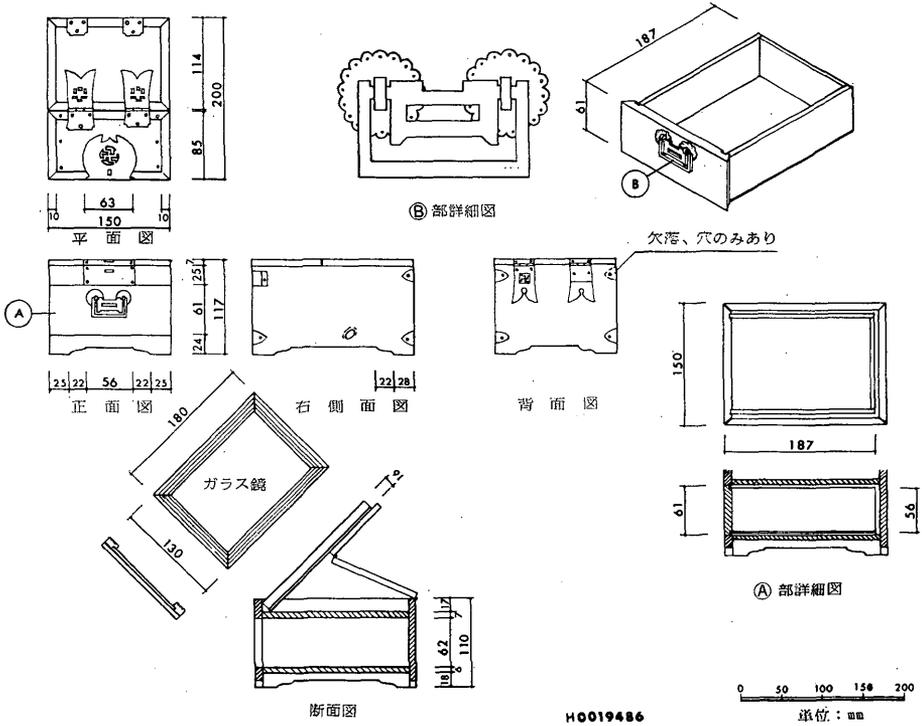


付図8 貴重品入れ 現地名 머리장 (mōrichang)

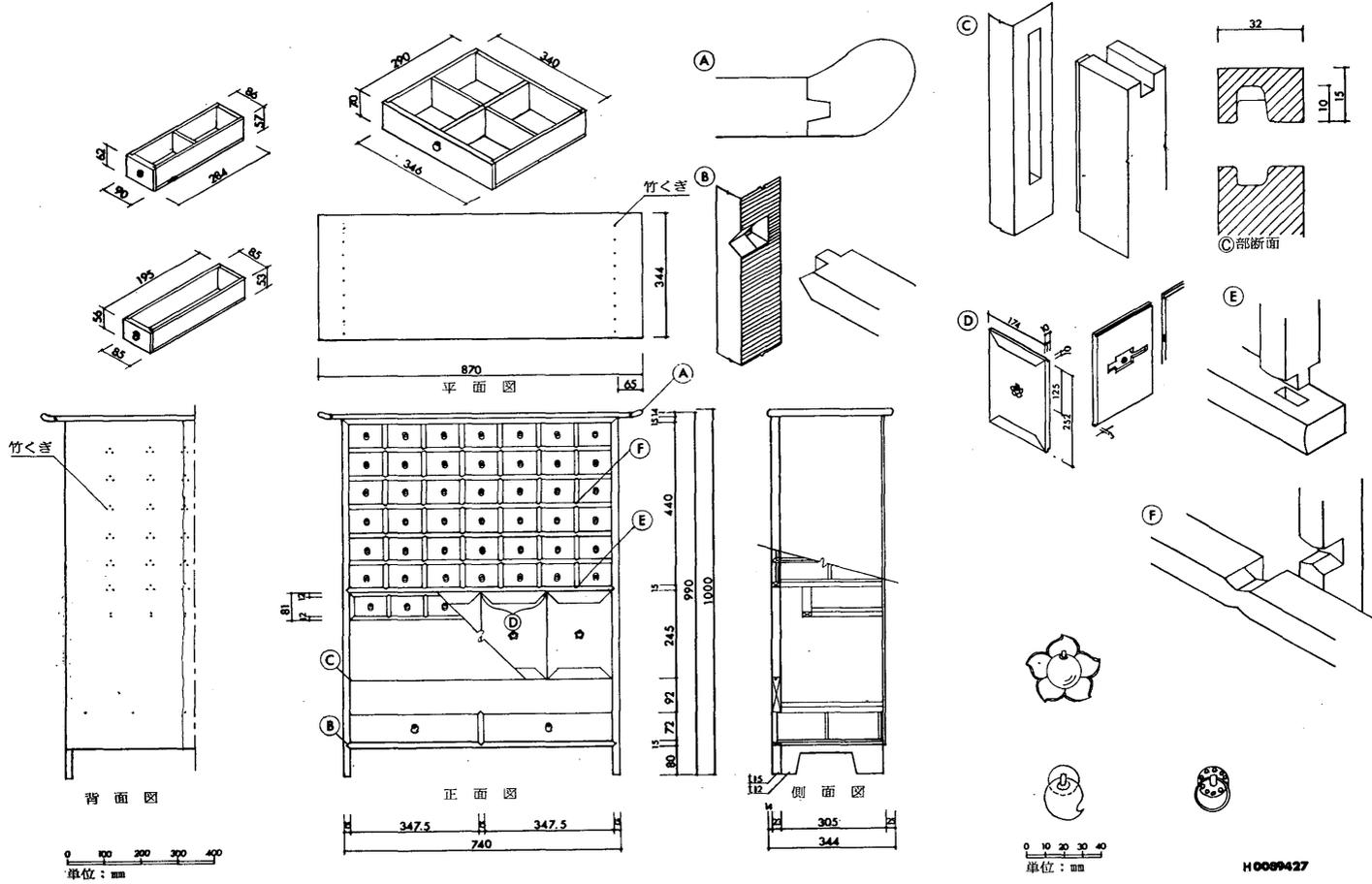




付図10 書類戸棚 現地名 sangmun'gab



付図11 箱鏡 現地名 함석경・箱石鏡 (hamsökkyōng)



付図12 薬だんす 現地名 약장・藥穢 (yakchang)